

ひょうご現代詩集2020

## 震災から二十五年、そしてコロナ禍へ日常を生きること、詩を書くこと

時里 二郎（兵庫県現代詩協会会長）

兵庫県現代詩協会は、阪神淡路大震災をきっかけに、一九九六年に誕生しました。設立前夜の経緯については、「ひょうご現代詩集2016」に詳しく記されています。未曾有の震災体験が、詩を書く者たちに突きつけたもの？それは何よりも詩を書くことの根源に触れる大切な問いかけでもあったわけです。詩は、震災直後から書かれ、惨禍を伝える記録として、亡くなった大切な人への鎮魂として、瓦礫のなかの生活からの再生として、営々として書き継がれてきました。兵庫県現代詩協会は、それぞれの詩人たちのそうした震災体験に根ざした思いや問いかけを共有しあい、仲間の詩を読み、みずからの詩を振り返り、詩に対する思いをあらたにする共同の場として作られたものだと私は理解しています。

もちろん、震災から二十五年が経ち、このアンソロジーから震災に関わる詩の割合はすいぶん小さくなっていきます。しかし、この協会の原点に阪神淡路大震災があることの意義を忘れてはならないと思います。振り返ってみても、この二十五年の間に、東日本大震災ならびにそれに関連した東京電力福島原子力発電所の事故がありました。この大きな災厄がもたらした社会への影響もはかりしれません。被災地であるなしに関わらず、詩を書く者にとっては（他ならぬ阪神淡路大震災を体験した私たちにとっては）みずから問いかけなければならぬこと。

そして、今年は何よりも新型コロナウイルス感染症の世界的な流行です。このコロナ禍もまた、とほうもなく私たちの社会と日常に大きな影響を与えました。そして、今なおその終息の目途はたっておりません。いまだそ

の渦中にあります。

今までの生活のスタイルが一変しました。マスク生活、三密、緊急事態宣言、ステイホームなどなど、このような異様な日常が、短い期間で収まるものなのか、それともこれから長くほんとうに日常化していくものなのか、なんとも言えませんが、少なくとも、コロナ禍がもたらしたものは、これからも私たちの社会に深く影響を及ぼし続けるのではないのでしょうか。

他にも、私たちの社会の行く先に大きな不安と懐疑を抱かせることがらは多くあります。日常化した豪雨災害、猛暑と熱帯夜を引き起こす異常気象の原因と考えられる自然環境破壊や、グローバルな経済拡張などなど。

私たちの日常は、それらの社会と深く関わっているの言うまでもありません。

詩を書くということもまた、その影響を受けざるを得ないでしょう。このアンソロジーでは、その問題を考えるうえでもとても貴重な詩の実践が収められています。

ただ、確実に言えることがふたつあります。それは詩は言葉で書くということ。そして詩（の言葉）は誰でもない自分の身体から紡がれるということ。その基本的なことをゆるがせにせず、それらの詩の問いかけに向き合うことが大切なことだと思います。

まだまだ、不穏な社会、将来の見通せない世の中ですが、そういうときこそ、兵庫県現代詩協会が設立された二十五年前にたち帰って、その問いかけを共有しあう詩の仲間がいるということの心強さをかみしめたいものです。

二〇二〇年十一月

目次

震災から二十五年、そしてコロナ禍

～日常を生きること、詩を書くこと

時里 二郎 二

ペイル・ブルー・ドット／赤ワイン色のエプロン

相野 優子 八

額縁

青木左知子 一〇

朝からブルース

朝倉 裕子 一二

蜥蜴は虹色に輝くが

芦田はるみ 一四

風景

あだちかつとし 一六

八月のひかり——鎮魂賦

阿部 由子 一八

極相のエチュード

安西佐有理 二〇

花ことば……わたしだけの……

井上 修子 二二

反乱

猪谷美知子 二四

裁縫

今村 欣史 二六

2階寝室のエメコ

入江田吉仁 二八

日差し／夕焼け

岩井八重美 三〇

船乗りへ 岩崎 風子 三二

時のすき間の挨拶 内田 正美 三四

押韻の黄昏 梅村 光明 三六

あふれる星 江口 節 三八

心の水彩画 大石 玉子 四〇

ノートに書かれた文字 大西 隆志 四二

わけなく 大橋愛由等 四四

穴の中 尾崎 美紀 四六

蒼きふるさと 和比 古 四八

とつても大好き土座衛門(抄)

エントロピー 神尾 和寿 五〇

宙の舌端 亀井眞知子 五二

小鉢には／出戻り 香山 雅代 五四

錆びた時刻板 彼末れい子 五六

帰還 神田 さよ 五八

海辺に棲むアデラ 北川 清仁 六〇

煙仲間 北野 和博 六二

季村 敏夫 六四

おみくじ／また明日

工藤恵美子 六六

驟雨／ねじ式

黒住 考子 六八

島のわたし

黒田 ナオ 七〇

笑う人達(仮想)

小杉 ヨウ 七二

風

小西 誠 七四

今ここで／秋が

佐伯 圭子 七六

風／ゆめ

佐土原夏江 七八

枯木立

坂本 久刀 八〇

五十二日間

在間 洋子 八二

蜚蜉の翅／この世の外

紫野 京子 八四

希望／あすなろ

柴田 実 八六

ものがたり

関 はるみ 八八

忘却／牢番

高木 敏克 九〇

空気……鳥……血

高谷 和幸 九二

21世紀の迷路

たかとう匡子 九四

カイゲンの町で

高橋 夏男 九六

角行

高橋富美子 九八

七十五年目のメッセージ たかはらおさむ 一〇〇

粉々の(へふうう) 竹之内 稔 一〇二

F君のこと／ラ・フォンテーヌの寓話より 田中 信爾 一〇四

夢も見ぬ長い眠りの日に 田中 莊介 一〇六

お腹 武内健二郎 一〇八

贈り物のように 田伏 裕子 一一〇

五月二十三日通り 玉井 洋子 一一二

海を越えて来た手紙 玉川 侑香 一一四

月はいつも突然に／トンネル 田村 周平 一一六

ごめん 月村 香 一一八

待つ 辻岡真紀子 一二〇

繋留 寺田 操 一二二

白い風の実 時里 二郎 一二四

てる み 中堂けいこ 一二六

ころなが ころなに 永井ますみ 一二八

五平餅の思いから 中川 道子 一三〇

握手／旅の途中／enough／連絡帳／家族の思い 中島 友子 一三二

廊下	中嶋 康雄	一三四	神の使者	松下 玲子	一七〇
生きている者は	なす・こういち	一三六	逢瀬	丸田 礼子	一七二
マスクを縫う	西海ゆう子	一三八	予定は	水こし町子	一七四
空っぽの椅子	西村 好子	一四〇	本当は	宮浦 久子	一七六
属すると言うこと	にしもとめぐみ	一四二	一日中撮られっぱなし	三宅 武	一七八
お水を一杯	野口 幸雄	一四四	酔人の夢	室井 正彰	一八〇
今年の秋／みすてないで	信定 和美	一四六	尹東柱の碑	望月 逸子	一八二
大神	野元 正	一四八	米を研ぐ	森田美千代	一八四
手のひらの地図	橋本 千秋	一五〇	地名抄補遺 三篇	安水 稔和	一八六
ミヤちゃん	八田 光代	一五二	折り合い	山口 洋子	一八八
旅をする	浜田多代子	一五四	黙祷の先へ	山下 輝代	一九〇
はじまりの場所へ	平岡けいこ	一五六	母子手帳	山下 晴久	一九二
未来の記憶	福田さとる	一五八	風にかづける(心象スケッチ)		
須磨にて影を汲む	福田 知子	一六〇			
森の奥へと	福永 祥子	一六二			
アイデンティティー	藤井 清	一六四	明日のことはあすの風に	山中ゆきよし	一九四
地味な事件簿	牧田 榮子	一六六	渴き	山本 眞弓	一九六
笹舟／手紙	増田まさみ	一六八	蜻蛉	山本 彰子	一九八
			耳	横山美代子	二〇〇
				吉田 定一	二〇二

引き継がれる生命<sup>いのち</sup>／きつと……神様になれる

測れない距離	凜 清太	二〇四
	渡辺 信雄	二〇六

会員の発行物(詩集、詩画集、詩誌ほか) 二〇八

編集メモ

一一二

宇宙にある二千億の銀河の中の  
一つの銀河団の中の一つの銀河の中の  
一つの恒星である太陽の  
惑星のなかのひとつ

三〇年前に

NASAの探査機ボイジャー1号が

六〇億キロメートル彼方から

撮影した写真に写った地球は

儂げな青白い点のように震えている

顕微鏡で見えない敵と

勇敢に戦い続けている人々がいても

すべての生命をなかつたことにするほどの

武器を使ってでも権力を守ろうとする人は

いったい何年生きるつもりだろう

ひとりだけで

目の前をゆったり流れてゆくゆたかな河が

あつという間に盛り上がって

村を飲み込んでしまうのがひとつの現実なら

飲み込まれた多くのいのちの時間が

どこかに運ばれてゆらゆらとたなびいている

反転した世界があると思いたい

細々と生きている生物たちの排泄する

二酸化炭素がゆらゆらと立ち昇っていたのか

乱暴にもぎ取られた命が

その星の周りを漂っていたのか

奇跡の水惑星と言われた美しい星は

蒼ざめた光でかぼそく点滅しているだろうか

いまでも

まだ

## 赤ワイン色のエプロン

なおこさんにいただいた

赤ワイン色のエプロンには

胸に大きなポケットが三つ

おまけのちいさな細長いポケットが一つ

大きなポケットにはなんでも入る

たとえばスマホ たとえばメガネ

たとえばポストイット

ハンカチ 軍手 雑巾 キッチンタイマー

出しそこねた手紙

言わないで我慢したことは

赤ワイン色のエプロンは

じょうぶな木綿の生地で作られていて

なんと洗っても色褪せないし

腰ひもを外してエプロンの両端を持つと

鳥の翼のように広がって風を集められる

早朝に起き上がって

いきなりパジャマの上にエプロンをつけ

想像力のネジを巻き

こちらの方位を定めれば

オーレ!

東アジアの島国の小さな町から

ポルトガルのロカ岬まで飛んで行って

大西洋に沈む夕陽を眺めながら

きのう失った恋人と愛をささやきあい

いそいで帰って来て

あたらしい一日を始めることもできる

小さなポケットには必ずえんぴつ

いつでも詩を書きとめられるように

## 額縁

青木 左知子

白いおんなが いた  
蒼い馬が いた  
雨の斜線の向こうにあか紫の月も 出ていた  
振り子で回る時針はりの音もしていたし  
枝先で果実がはじけ 根もとでは  
くたびれた筆記具が散らばっていた  
それぞれは互いになんの関わりもないが賑やかで  
すべて  
ひとつの画面であった

彫りこんだ薔薇をからませ  
木枠は画面を抱えていた  
抱えて いた  
いた いたのだった  
画像は 剥落して  
いまはもう ない

額縁という木枠は  
花びらの襞の湿気た埃に身を傾け  
仕切られた壁面は影色の空間  
そこにはもう  
きつぱりと  
内面は  
なく

そよりと風を動かして  
木漏れのひかりとともに  
窓ガラスを抜けてくる埋葬されたものたち  
もどりたい場所を探すやさしい気配の  
ささめきに  
花襞の奥の蝶の羽化  
群舞の鱗粉にまみれて  
いっそうわたしはわたしでなくなり  
かれらをとりこむこともできず  
キリキリと痛む片目で  
ながめている

## 朝からブルース

朝倉 裕子

ラジオからブルース

フルオンザヒル (\* )

文旦の皮を剥きながら

今日の予定を思い巡らす

詩を読むより景色を眺めていたい

それは疲れているとき

景色を眺めるより詩を読んでいたい

これはちよつと危ないとき

イエは膨らんだり縮んだり

働いてそれでヒトの役目は終わるはず

さっぱりした成り行きに

胸のあたりが騒がしくていたい

繰り返し夢に現れた  
停車場のホームから  
ヒトが溢れて  
押し出されていたい

明日

始めて乗ってしまいそう

行き先を知らない電車はいつまでも

廻っているにちがいない

(\* ) 作詞作曲…レノン／マッカートニー、原曲はスローバラード

## 蜥蜴は虹色に輝くが

芦田 はるみ

今年の梅雨はなかなか明けないが今日は雲の間から太陽がでて余計に蒸し暑い。病院帰りの上り坂はいつもにまして長い。照りつけられたアスファルトに生まれたばかりだろうか小さな蜥蜴が飛び出した。体は半分ぐらいの大きさなのに一人前に虹色に輝いている。

だから赤字になるんや。受付の女の人に背を向けた途端に毒づいた男がいた。男の奥さんは足下がふらついている。男は壁にたてかけられていた院内専用の車椅子をみつけてそちらへと促している。広い病院は移動だけでも大変だ。診察室が並ぶ廊下から受付へといわれてやって来たようだが先にエコー室だと案内された直後の出来事だった。ようやく車椅子の方へ近づいた奥さんを前にして男は車椅子を開こうとしたがうまく開けられず足まで使って格闘している。待合にいた婦人がみかねて手を貸した。男は先ほどの車椅子への横暴とはうってかわって丁寧その婦人に頭を下げた。奥さんにはさらにやさしく声をかけた。ちゃんと検査データーも持ってきたから心配はいらんよ。二人はエコー室を探しながら待合を後にしたのだがまもなくさらに怒りを大きくして戻ってき

た。先に診察だと言われたらしい。あっちへいけ、こっちへ行けとほんまに。しかもあろうことか訪ねてきた医師は急な休診だという。休みやったら電話ぐらいしてくれ。男の怒りはおさまらない。受付の女の人は頭を下げながら代診の医師の名前を告げている。おりしもコロナ禍で待合の椅子にはテープが貼られて数が少ない。入り口近くにいた人が席を譲ると男はまた丁寧にお礼を言つて車椅子を引き寄せて腰をかけた。それから、先生休みらしいわ。帰ろうか。奥さんの返事を待っている。

夕方、突然に大雨。雷。ずぶ濡れになった中学生が声をあげて坂を下っていく。あの蜥蜴は黒く濡れていくアスファルトを渡り終えただろうか。輝きは虹色のままで。今年の梅雨はまだ明けない。



## 風景

あだち かつとし

りょうけん

家の裏側に  
りょうけんという丘があった  
春が来ると梅の花が白く咲いた  
ぷうんとした甘い匂いが快かった  
ぼくは丘から下界を見渡した  
多くの住む集落がある 遠くには隣の集落  
その間を円山川が流れていた

役場前の広場で防火訓練が行われた

大人たちは水を入れたバケツを運んだ  
子どもたちは丘に避難した  
丘には防空壕があった

秋が来ると柿が実った

山栗拾いに出かけた  
柿も栗も貴重な食べ物であった

冬が来ると竹スキーを作り

丘から滑り降りた

丘に登るとぼくは未来のことを考えた  
どんな未来があるのか分からなかった

丘には年々歳々春が来ると

梅が咲く

ぼくはいつのまにか年寄りになっていた

きのみが鼻

集落のはずれにきのみが鼻という所があった  
そこに祖先の墓があった  
大きい墓石小さい墓石が十基ぐらい  
榊の木が植えられていた  
盆が近づくと墓地に行く  
草をひく 墓石を洗う  
花を供える  
山からは蝉しぐれ  
夕方ようやく掃除が終わった  
明日は十四日 夜明けに墓参り

糸井橋

橋は隣の村と行き来するものであった  
大人たちは川で鮎とり  
小舟を浮かべ 網を投げる  
鮎はさっと逃げる  
すらっとして綺麗であった

捕えられた鮎は

どこかに売られていった

若宮神社

神社は小高い丘にあった  
檜や杉の太木が茂っていた  
境内は静寂そのもの  
宵宮には奉納相撲 篝火が焚かれ  
村人が土俵を囲み  
声をあげて応援した

相撲が終わると若者は宮籠り

この夜は無礼講であった

ぼくからも

お神酒をいただく

村中 稲の香りが漂っていた

八月のひかり ― 鎮魂賦

阿部 由子

眩いひかりをいっぱい浴びて  
あなたは佇んでいる

心躍らせる少女たちの声が遠くこだまして  
照りつける日差しを浄化する

ただひとつのことだけを伝えようとしても  
声にならない言葉が滴り落ちてゆく

耳を傾けてそっと微笑むあなたの仕草が  
いま記憶のスクリーンをよぎる

自分のおしゃべりに夢中になって  
ぬるくなったコップの水で渴きをうるおす

身を裂くような痛みを慄き  
心を昇華する祈りの時を待ち続ける

硬直した小鳥の亡骸さえ  
意識を超越して夏の空を渡ることができる

夏の訪れを告げた昆虫たちも  
土に還る悠久の儀式に耽ることができる  
なのに あなたの背は形を失い  
眩いひかりの中で暗転する

八月のひかりを浴びて  
すべてが影を奪われて溶けてゆく  
あなたの葬列に立ちはだかる意識  
それさえも遠い明日への憧憬

## 極相のエチュード

安西 佐有理

あれほど美しかった、小さな男の亡骸でこしらえた半立体作品が、まだやわらかいといえ急激に青ざめて萎んでいくのを慌てて椅子の陰に押し込んで駆けていくと、気体で満ちたりた大柄な女の亡骸である装置がふわふわと踊り、いきものの体温で握手を求めてきた。それは枇杷の並木が、プラタナスの街路に溶ける細い道の突き当たりでの遷移だ。建物のおもてを飾る鋳物の柵はどれも大ぶりの流線模様で、蔓植物が繁茂した時代を回顧し、再来に備えている。ここに、祖母の家もあった。朽ちかけても変わらず息を吐いて育つ家のなかで、かつて鏡台であった懐かしいオルガンを開き、乾いた肋骨ほどの鍵盤をはずして、抽斗に収められた何枚もの鼈甲の板をとりだしては、天井だったあたりの外光にかざす。(一緒に見つけたあわい水色とピンク色のウサギの文字盤の腕時計は電池を交換すればいつか遊びに来る幼い子が使うはずだと、修理屋の営業時間を考えながら。)

この空気のこととは知っている、と思う。

死んでいった人の数か、名前だけが舞い込むうちにも、人を生きた気配は林のどこかにしまわれていくのが日課であった。夜明けに歩いた山裾の散歩道の脇で首を吊っている人がいたことさえ、後から聞かされたのだ。あの林道の、強い光を好んだ陽樹は、もう入れ替わった頃だろう。鮎色に透かし見る、よわい陽

ざしをやさしく濁す斑点が音符だと気づいた、瞬間。鍵盤に代わって歌いだそうとしている。わたしもまた遷移のなかで収束していくのは、もうじき川沿いに夜を照らし、歩行者だけでなく空と海の旅人にも合図する、いつもの塔の街のあかりと同じぐらい明晰な夢であるという曲を。

花ことば…わたしだけの…

井上 修子

露草は 母の想い出  
老いゆく母は くりかえし  
ふるさとの夏を 語った  
いくさに敗れた あの夏も  
青い花は 咲いていた  
朝露を 涙のように光らせて…  
露草の咲く道を 歩き続けた若い日々…  
それからの 長い道のり

露草 月草 蛍草

昼にはうつむき 涙ぐむ

露草 わたしの花ことば

いつまでも あなたとともに…

鷺草は 遠い想い出  
羽をひろげた シラサギの  
姿そのまま 美しい  
ふみしめ登る 山深く  
白い花は 清らかな  
谷のせせらぎ 聞いている  
いつか二人で鷺草を みたいと誘ってくれた人  
はるかな山に 眠る人

鷺草 小さな空でいい

そっと とびたつ夢をみる

鷺草 わたしの花ことば

陽だまりに あなたを想う

ゆるやかに 時間は流れ

こころ静かに和む日は

野に咲く小さな花たちの

やさしい声がきこえてくる

## 反乱

猪谷 美知子

探していた砂時計ができた  
こんなところに  
相変わらず砂はさらさらと落ち  
律儀に  
時を  
刻む

この時計の砂が目詰まりを起こしたのまでは覚えてる  
それからずっと刻がすぎ  
忙しい日々はつつがなく  
今 何事もなかったように落ちていく  
ほんとうは落ちるなど叫びたい  
悲しいまでに律儀な砂よ  
随分年を経て疲れているはずなのに

小さくなっているかもしれないのに  
それでも決められた時間内に落ちていく  
砂が落ちたくない  
と真ん中のくびれで叫ぶとしたら  
よしよしとなだめれば  
やさしくさすってやれば  
分かるよ分かるよと耳を傾けてやれば  
よいだろうか

微細な砂粒は反乱を起こす  
ありうることだ  
その前にくびれを割ってしまう  
それもできうることだ  
割られたガラス  
指は  
血に  
染まる

## 裁縫

今村 欣史

マスク

テーブルの上で裁縫をしている  
コリコリコリコリと  
心地よい音を立てている  
裁ちばさみで布を切る音だ  
手ごたえのある音だ  
次は  
クククッという音  
切る布によって微妙に音が変わる  
生きている音だ

わたしの皮膚はもう  
こんなにもいい音を立ててはくれない。

握りばさみ

静かな裏通りである  
夜には物音ひとつしない  
テレビを消すと静寂が訪れる  
時おり  
パチッと小さな粒が弾けるような音がする  
部屋の隅にまで響いている  
妻が背を丸めて  
縫いものをしているのだ

静かな部屋で  
握りばさみの音がしている  
パチッ パチッ  
老夫婦の夜である。

## 2階寝室のエメコ

入江田 吉仁

気温が上がってくる季節になると、ここいらでは、人によっては、昼の間は外からの熱気をさえぎるため部屋のカーテンを遮光カーテンまでも閉めておく。部屋は暗く、風だけが出入りしてときたまカーテンをゆらす。たいていは無人の時間が過ぎる。

時刻が来て、寝るために部屋に入ると、人によつては、カーテンを閉めたり、閉めたままで常夜灯をつけたりするが、エメコにはカーテンを開けてもよい時刻になる。濃い遮光カーテンを開けると、暗かった部屋の、窓と向かい合う壁に白くもようが浮かぶ。部屋全体もうすあかるい箱に変わる。もようは窓から部屋に入ってきて

街路灯に照らされたガラス窓が壁に映っている。窓2つで壁に2か所、四角な窓の形に壁が白い。レースのカーテンの地模様がうすく飛んできて浮かんでいる。10mほど離れて道の向こうに立つ街路灯から、上向きの光がこの2階で窓を照らして部屋のその壁に映した。月のひかりが床に落ちるのによく似ている。さわがしくないひかりにエメコは記憶をたぐる。エメコは、聖堂の壁にスタンドガラスが並ぶのに似ているとは思わないことにしている。その白さだけを明るさの頼りにして、常夜灯の代わりになるので、エメコはそのまま布団の上に腰をおろして上体をかたむけていくと、窓下の壁が目よりも上に上がって、窓越

しに見えていた隣の家の壁と三角の屋根とが隠れた。隠れてしまうと先には空だけが見える。

そうすると、街路灯も窓より下にあるので、腰壁の下に隠れて目に入らない。窓からは、レースのカーテンを通して空が見える。夜着の女が横たわっている、空しか見えないので覗かれることはない。レースカーテンも開けても心配ない。ただそこまではと。

エメコはふとんの上で全裸になるバジャマのまま全裸になりきるなりきって空が覗き見るにまかせると、星々は次々に巡って窓にかかつては離れ、次の星が窓にかかり、また離れる。レースのカーテンが街路灯で明るいから、覗きかける星々の目はどれもその明るさにはばまれる。ふとんのあたりは暗く陰になって、エメコをあからさまに見れない。それで、エメコは無事だ。

朝までこの関係を許しあうと、エメコは、にたりとして、かけぶとんもいらぬ。

## 日差し

岩井 八重美

でこぼこ道をバスは走る  
車掌は若い女性  
切符を切るために  
懸命に足を踏みしめる  
私たちの前に立ったと思ったら  
突然に尻もちをついた  
思わず吹き出す母  
慌てて目を逸らす父

柔らかな日差しが  
あやすように揺れていた  
待たせたおわびにと  
秋風が運んできた  
隠れていた記憶  
同じ日差しに包まれて  
半まどろみの  
幼い瞳の奥から  
甦る

何食わぬ顔で  
平然と切符を切る車掌  
笑ってしまったことを  
恥じて俯いたままの母  
刈り入れがたけなわの  
風景を見つめる父を

## 夕焼け

また あしたね  
友達との指切り  
外すタイミングがつかめずに  
指をからめたまま  
いつまでも続く  
くすくす笑い

あたしを照らす  
夕焼けさえ騙せる  
でも 時々思ってしまう  
騙されているのは  
あたしの方かもって

微笑ましく  
あどけなく  
少女らしい少女のふりで  
人を騙すことは簡単  
今はそれだけが  
あたしを支えている  
恥ずかしいほどに



## 船乗りへ

岩崎 風子

あけはなした船室のドアから  
夜明けはすぐになだれ来て

若い船乗りのしなやかな膝を包みこむ

太陽と潮がしみこんだ硬い腕と赤銅いろの背は  
戦い終えて放心した野獣のにおい

ゆうべ恋人が去った

彼のねむる地平にはまだすももの香り

すぎていくのは波の音 荒ぶる海の鳴り

砂の上に落ちる影が

あまい出会いのときより深く

まだ青い肉体の断章を描き分けている

彼には何もきこえない

冬の海の忍耐も

くろ雲の岐れに視た難破船さえも

目醒めるまではただ淡く

つかみきれない心海の錘にすっぽりと両手をゆだねるばかり

終わった恋が少しづつ 漂うようにとおざかる

ほしいままの遊泳だったとしても

船乗りよ ふり向くな

どこぞの港に女はいても

一寸先の闇に黒ぐろとさか波は起きる

水平線のどこまでも

この世は巡礼のつづき

どんな潮流に乗ったとしても

丘にあがれば足のない靴

髭をおとし航る支度を備え 女のいない海里を

不敵に浪々と

囚われながら脈うっていけ

## 時のすき間の挨拶

内田 正美

無言のしばらくの時に どれほどのことばが贈られたのか  
どれほどの見えない花束が手渡されたか 生はいつも雨音の  
中からやってきて 音もなく去っていく

喪主の長くそれでいて簡潔な不思議な挨拶を聞いた 話は父が病を得たことより始まって よどみなく涙もみせず淡々と低い声が続いた それは遠い遠い散歩か 先の見えない回廊をひたすら歩くように続いた 親と子の時間のなかをさまよった記憶をたどり よせてくる波音のように声は聞えた（……父は眠るように息を引き取った）とうとうに男のよどみのない声はとぎれて男の挨拶は終わった

わたしたちは生きていて それで死んでいて それでもいい  
つも満員の電車に乗って 息苦しくて動くこともできずに  
目的の地もそれぞれに 電車にゆられて考えようとしてもしな  
いまま運ばれている 車窓の風景もガラスに映るわたしの  
姿も揺れている

男はもうひとりのわたしなのだ ある夜のことを思い出す ふたり  
だけの夜のことを 眠りにおちそうな女の耳もとで 聞こえないぐ  
らいの声でつぶやいた そのときの女の不思議そうな顔 ことばは  
どこまでおちた？ 雨音にまぎれて心音の中をどこまで

わたしたちはすでに死んでいて でもまだ生きていて 懸  
命に呼吸をする ことばを出そうとする なのになにも満  
たせぬままにかけた月 破壊と創造についやした長い時の  
なか 昨日と同じように道を歩く もう声も届かない夜の  
空

## 押韻の黄昏

梅村 光明

九鬼周造は祇園の出身という母親波津と父親の九鬼隆一男爵の部下である岡倉天心との恋愛関係が原因で離婚に至った事実には自分は天心の子供ではないかと思ひ発狂して死んだ波津への思慕から恋しさ寂しさの奥にあるいきの構造に辿り着くそれ以前留学先の巴里はソルボンヌで学生だったサルトルに仏語を習うがボーヴォワールはサルトルは誰に対してもやさしく寛大であったと言ひ周造の詠む短歌や詩への恋心の栄養分になったかも知れず帰国後に発表した日本詩の押韻は福永武彦と中村真一郎と加藤周一と白井健二郎と窪田啓作らのマチネ・ポエテイクと名付けたグループへ影響を与え後年加藤周一が日本語による詩の押韻の可能性に就いては既に九鬼周造博士が説き尽して余す所がないと書きそれを否定的に捉える三好達治は邦語現代詩に於ける押韻は他の何人が立ち替ってこれを試みても絶対に成功の可能性の見込みのないことを信ずると述べ福永に誘われ参加した原條あき子の押韻詩も収めた一九四八年に刊行のマチネ・ポエテイク詩集を試作と断じ諸君子の作品は魅力もなくつまらないと一蹴するが九鬼は三好の論は抽象的精神論に根差す反対論であり詩の成立には言語の意味と音数としての律と音色としての韻とが構成要素となり得るがこの三つの要素は絵画に於ける構図と描線と色彩との関係のようなものであるとすでに記していたが韻も律も持たない現代日本語を用いなければならぬ今日の日本の詩の混乱はほとんど絶望的な様相を呈していると考えた中村真一郎は江戸漢詩研究が吉川幸次郎に認められ京都大学の中国文学教授の職を九鬼と同じように後年祇園の置屋小村崎から大学に教えに出ている高橋和巳がまだ京都に戻る前吉川との年齢

差が大きすぎるのでその仲継ぎ役に迎えられる計画は立ち消え同じ頃塚本邦雄から寺山修司に今のところひどく素朴だと報告された鈴木漠はその後押韻定型詩を詩集投影風雅で実践すると共に連句はすでに音数律定型の様式を確立しているのだからその上に押韻が加われればかつて九鬼周造が望んだとおりのソネットの名に相応しい詩の様式が現前すると率先して押韻俳諧を巻き続けさらに全国の詩人や連句人にも問題提議した

## あふれる星

江口 節

こんなにもわたしたち  
つながっていたのだった  
あなたの吐いた息を  
わたしが吸い  
わたしの言葉にまみれて  
散らばって  
会いたい誰かに継る  
境目は元より無くて  
地上に国境線は見えませ  
んと 宇宙飛行士だったね  
はつ夏の青空を切り分けた  
飛行機雲もみるみる消えて  
あんなにも欲しいと  
望んだ時間は 籠から

あふれ零れ収束する  
来し方行く末  
あれは 何だったのか  
記憶は どれも  
裏漉し重ね煮みじん切り  
東の小国のは弁ず  
やぶからほうに また  
言い換え 否 すり替え  
失政墮政他人のせい  
民草たち泣かぬなら  
泣くまで待とう  
ものは言いよう 堂々  
言い繕う その場限りの  
長に向かつて挑めよ

言葉の実と虚 裏と表  
単なる言葉ごときか  
言葉が背負うものを見たか？  
言葉を背負うものは来たか？  
そのとき  
詩は何処へ行くのか  
居る  
わたしは 居る  
この家 この星  
みんないっしょに ああもう  
縁からあふれそうだ  
つながったまま

牛飼い座を横切る灯  
西に向かう飛行機ひとつ  
飛んでいるんだ、こんな夜  
夜を追って夜へ  
飛ぶ  
飛ぶもの  
うっすらと  
水の被膜に包まれて  
飛ぶもの

不意に  
手枷足枷振りほどかれた  
深夜

## 心の水彩画

大石 玉子

その家は  
家の前に 川が流れているのです  
家の裏は畑になっついていて  
畑は 山へと続いています

その家に入って行くと 人は皆  
何となく ホッとします  
カフェがあり 展示室があり  
夏には 涼しい風が吹き抜けて  
絵本箱が並んでいる部屋もあります

小さな お友だちも  
大きな お友だちも  
お父さんも お母さんも  
おじいちゃんも おばあちゃんも

おしゃべりしたり 寝ころがったり  
時間は ゆったりと流れて行きます  
カフェのスタッフさんは 楽しそう  
お客様たちは  
心のこもったクッキーや お茶 そして  
自由に使える絵葉書もあります  
その家から 歩いて三分の所に  
赤いポストがあり  
絵葉書は そこへ投函されるのです

四季の流れは  
いつも おだやかとは言えません  
でも その家の回りでは  
時間は おだやかに流れています  
そんな家があれば・・・ きっと！

## ノートに書かれた文字

大西 隆志

卓袱台でノートをつけている  
あなたは遠い季節に亡くなったはず  
中空に浮かんだ今のくらしの場ではない  
僕はおばあさんの家に預けられていた  
でも、その母の里の家でもなく  
加古川の実家の六畳の間  
のようだ、こじんまりとした少し畳が沈む家  
二階にはあなたの筆筒があり  
後になって多くの部屋になった  
薄暗い電灯の下でペンを走らせて  
使ったお金を記入していた  
廉売市場での大根、白菜  
日を乗り越えるときには現金が必要な時代  
米櫃のお米も生きていると減るのだ  
大きな財布のなかの硬貨は  
紙幣よりも大事だと思っていた  
その時のノートが

本箱の奥からあらわれた  
そのことはあなたの  
筆跡の特徴が紙に少しの圧力をあたえている  
時間は紙の酸化をうながし  
僕らも焼けていく  
暮らしも焼けていく  
新聞紙をひろげ鉛筆の削り滓は丸められる  
少しの希望は丁寧に畳まれ  
部屋の片隅に積み上げられていた  
ナイフで削りとる  
暮らしの記録、日々の揺らぎ  
僕が中学二年で実家に戻ってきてからは  
いつノートを書いていたのか知らないままだった  
信心深いあなたの日課は  
神棚への祝詞と仏壇への真言  
僕は二階でレコードを聴くことが  
やんわりとする拒絶だった  
病院に入る前のあなたの最後のノートは  
どこへ行ってしまったのか  
まだ卓袱台でノートを付けているのか

差延の果ての異端尋問の内緒話には（あからさまなまなざしがワタシを無援して）つまづきの路に迷ったあげく昨日しるしをつけておいた街路樹からため息に酷似した樹液が垂れてきているのをそっと教えてくれたのはきみだったかきみたちだったのかその唇はきつと短母音だけを発語しすぎたせいなのだろう肉厚になっていたのを見逃さなかったけれど心の奥底にひそむ種子がカラカラと鳴っていたのが分かっていたので「ああようやく蝶の旅支度ができた頃なんだ」とつぶやいていた。あからさまなまなざしが無夢な午睡に浸っていた石を覚醒させて～ワタシは何日も繰り返し反都市の仮面をかぶったままのだけれもない街路を行ったり来たりただひたすら歩きつづけていたところ出会ったのはビルのすき間から駆け抜けてきた異類婚ばかり語りつづける微風であつたが言葉をかわずことなくラララと歩いていたところ蔭を真似して踊れたのが雌雄同株な詩人であつて永遠を円卓の上でころがしては気ままに頌歌をうたって毎晩寝台で添い寝しているのを羨ましく思わないわけはないけれどせめて永遠が乾かないように極水をどれほど注げばいいのか教えてもらおうと思っている。あからさまなまなざしのため月は気孔を無垢なまま半泣きで閉じてしまい～父と母の出自が樹液を指して集まる声たちの口誦歌で伝えられていると知ったワタシは計測器をもちだし街路樹のアポリアをひとつずつ測りながら手帖に記述しては口誦歌を聞き取ろうと待ち構えているうちに父のバスケット帽を取りに帰ろうと実家に向かったのはいいもののいつまでたっても実家にたどりつくことができずに深更も味爽も歩いてばかりいるのだけ。

## 穴の中

尾崎 美紀

かさぶたをはがされて無防備な  
深夜の県道に  
湿った土が顔を出すと  
ぽかりと空いた穴から  
置きざりにされた時間がこっそりのぞく

ああ、ここはむかし競馬場だった  
すっかり忘れていたが  
毎日 競走馬が糞を落としながら闊歩した道だった  
遅い春先にはアスファルトの裂け目から  
地球を持ち上げる勢いでハハコグサが咲いた

いつしか  
競走馬はどこかに追いやられ  
競馬場もつぶれた

大きなローラーでアスファルトが鳴らされていく様子を  
熱気でむせるにおいで覚えている  
父も母もここに眠っている  
私はまだおかつぱだった

掘り起こされた傷口に  
グンプが連なつてのしかかる夜更けは  
澄んだ馬の瞳を思い出す  
もう馬も人も いなくなつて  
故郷と呼べる町もない

舗装された穴の奥から  
軽やかな  
ひずめの音が聞こえてくると  
冬空から はずれ馬券が降ってくる



## 蒼きふるさと

和比古

求めてもいないのに  
ふるさとの舞台として  
蒼きときが  
呼び戻される

かつて独り  
部屋を出て  
神社の森を  
歩いたものだった  
春は新緑の若葉に  
喜びの挨拶をし  
秋は紅葉の色に  
心を寂しくした

小さな川の流れが

孤独な空間を創っていた  
心象風景として  
過ぎ去りし記憶を映す  
たわいもない詩となり  
唯一の登場人物として  
自画像も描かれていた

大きな石の上で  
セピア色のアルバムを  
めくっているとき  
ハイドンのメヌエットの調べが  
脳裡を通り過ぎる

人生は長いようで短い  
青春のふるさとは  
遥か向こうとなり  
こころの旅は  
どこまでも続く

## とっっても大好き土座衛門（抄）

神尾 和寿

① ピアノを煮る痴呆の鍋  
一時間後に砂糖を投入  
薬指を沈め味見し思案  
溶けて焦げて笑われて

②

あさおきて  
はをみがき  
ひげをそり  
清潔な君を軽蔑するに  
いたった

③

カナヅチが  
事故にあわず  
病気にかからず  
にいればかならず  
いつかは 土座衛門になる

④

溺死者たちが浜辺に並べられた  
ピアノの鍵盤に似ていると思う  
そのためには巨大な掌が必要だ

⑤

世界中から  
スターが集まった  
彼は歌い手  
河馬並みの声量が国境を越える  
彼女は踊り子  
赤い靴を履かせたらもう止まらない

⑦

キミの都合で  
どぶんと湯船に飛び込む  
浪曲のようなものを唸ってから  
ワタシを誘う  
のも  
キミの都合の内のひとつ

⑥

あの少年は薬売り  
感激して卒倒した観客の口に特效薬を注ぎ込む  
絵葉書がとどく  
諸悪の根源はなにかしら  
突き止めてから  
くるりと

強弱をつけて愛撫をされる  
三十分くらい続いて  
ちっとも気持ちよくなならない

世の中ってそんなもの  
驚いている人はだあれもない

手のひらに抱え込まれたコーヒー  
 ちよつと不安をはらむ  
 デスプレイ画面で踊るキャラクター  
 ピコピコ クシヤ ペコン ピヨローン  
 キーボードの上を走る指  
 コーヒーカップをはじいてしまった  
 初めはこんな些細な事

部外派遣の雑巾を  
 机の上に投げ出し  
 掃討作戦が始まった  
 ボールペンが輪ゴムで拘束され  
 茶色に変色したペーパーは撤退  
 抵抗したホチキスが  
 箱の中の兵隊針に出兵命令

暗い引き出しを開ける  
 身を隠していたナイフ  
 容赦なく束ねて 切った紙  
 鉛筆たちの頭上で君臨した  
 過去の復権を狙い  
 ひりひりと 機会を待っていた  
 はぐれた赤いキャップは  
 親を探し 荒野をさまよう  
 ボールペンは五本 クリップ個数  
 メモ用紙は右の奥に  
 しつかり針を銜えたホチキス  
 出しそびれた手紙と  
 意味不明な資料はシユレッター  
 デスクマットの下に眠る五円玉  
 いつ行けるか分からない旅行メモ  
 過去と未来に分ける

積み重ねられた資料は  
 かしましく自己主張  
 書き散らかした雑文メモは  
 新たな歴史の構築を始めた  
 少数派の鉛筆と消しゴムは  
 書いて消しての ゲリラ行動  
 季節外れの卓上扇風機  
 ずぶ濡れの机で フル回転  
 テレビのコントローラは  
 真ん中でごろ寝  
 どこから出てきたのか色付き輪ゴム  
 束ねるものが 髪か紙か  
 神に問う 祈りを始めた

窓の外 燦燦とそそぐ太陽  
 エントロピーの法則で  
 増大させたエネルギーは  
 私の体力では追いつかない  
 また明日 片付けよう

\* エントロピー：エントロピーとは簡単にいえばゴミ  
 \* エントロピーの法則：可逆変化ではエネルギーは不  
 変。不可逆変化では増大する。エントロピーが大き  
 い状態は乱雑の度合いも大きい

## 宙の舌端

香山 雅代

生きて

宙の 舌端へ

豊かな ことばを

増殖しながら

時を 紡いでいる

起きていても

休憩やすんでいても

退屈な時間

千日の稽古を 鍛

万日の稽古を 練 と称したというが

千日は 石の上にもと同じ 約三年

万日は その十倍の 約三十年か

危機を孕んだ空間を 増殖する  
淋しい空間が  
たとえ 明日へと  
明るく  
つづいていたとしても

間断なく 生気を吐きつづけて  
眠りつづける人の傍に  
横たわる 大河  
緑を 敷きつめ 休むことなく

一点の 雲を 浮かべて  
遍ぼんと 拡がる  
彼方の 空へと 放たれる

ねがわくば  
生きて  
生きて  
生き抜いて

## 小鉢には

彼末 れい子

小鉢には

遠くのを盛ろうと思う

系統樹の図

その梢から別の梢までの

距離

できるだけ

遠くはるかなものを食べて

生きたいから

四つ足も 二本足も

足あるものは

お逃げ

海中にゆらめいている海藻も

一度は陸にいたのに

また戻らなければならなかった

光を求める生き物たちは すべて

いつでも

苦難の旅の途中

よく発酵させた米酢をあわせ

ワカメとキュウリの酢の物を

顎関節を動かして

ゆっくり 食むと

時間に似たようなものが

頭蓋骨の中で

崩れる音がする

## 出戻り

海藻の先祖は

一度は陸で生息をしていた植物が、

何かの理由で海に戻ってきた植物なのだそうです。

海藻は光合成をしようとしましたが、海藻は海の深い所まで生息しています。そのため、海の深いところで生きていくためには、最後に残った緑色の光を吸収しなくてはならないのです。少しでも多く光を吸収しなければならぬことを考えると、なぜ海藻が、黒、茶、赤、緑、などに分かれているのか答えがでてきますね。つまり、海藻の色の違いは、それぞれの水深に届く光をもっとも多く吸収できる色に進化した結果なのです。海面に近いところで生きている海藻は、光のほぼ全部の色を吸収するため黒色が多くなります。水深が浅いところでは、赤色と青色の光を吸収しやすくなるために、緑色や黒色に近い色になり、水深が深いところの海藻は緑色の光を吸収しやすくなるために赤色の海藻が多くなるわけです。吸収しやすくするために赤色の海藻が多くなるわけです。

## 錆びた時刻板

神田 さよ

きのうオフィスで上司と口論になった 帰りに仲間と飲んでうさばらしをした  
そのようなきの日だった ページは捲られた きょうはざわめくページ  
見えない不安が私たちを変えてゆく きのうまでの時間は錯覚だったのか

いつのまにか バスの停留所に立っている 時刻板は錆びていて数字は殆ど読  
みとれない路線廃止となったのか 水をひとくち含んでいると 汚れたバスが  
のろのろとやってくるではないか わたしの前でドアが音もなく開いた な  
にかが始まる予感として 吸い込まれるように乗り込んだ 前方に白髪の老人  
がひとり腰かけている 車内に行き先を示す路線図は無く アナウンスも聞こ  
えない バスはスピードを徐々に上げながら走りはじめた ふらつきながら老  
人の近くに座ると ぼそぼそと肩越しに話しかけてきた 車窓の風に白い髪が  
逆立っている 思い出せない わたしの名前 生まれたのはいつだったのか

荒れた地に夥しい屍が並べられ  
いつか見た収容所の大きな穴へ

防護服を着た人が白い根が混じった土を被せていく

わたしたちの父母

あなたの子ども

理不尽な死の境界はますます色濃く

祈りの無い埋葬

刻まれない墓碑銘

ひどい酔いがおそってきた 胸がむかむかしてもう降りたい 運転手は無表情  
の真顔でずっとハンドルを握っている 車内の時計は針がなくなっている 道  
端に蔓延るドクダミの花が不思議にいと美しい 根付いた草や樹木はこうして  
変わらず生き続けている 窓ガラスに罅がはいり 頭痛と吐き気 白い布を口  
に被せ言葉は咽喉にひっかかったまま 老人は眩き続けている 思い出せない  
わたしの名前 わたしはいつ生まれたのだろう

無名の骸は現れる

人の体で

生きた証として

いつか

## 帰還

北川 清仁

君は無い靴音で家の敷居を跨ぎ  
無い足の靴を脱ぐ  
父が無い喜色で無い君を迎え  
母が無いうれし涙で走り寄り  
家族一同が無いさやかな宴をもうける  
やがて無い縁談話が持ち上がり  
無い花嫁を無い君を迎える  
そして無い子供が産まれ  
父母が喜色満面で無い孫をあやす  
そして無い君は父母とおなじく  
年を重ねてやがて故国の土に帰すのだ

ああ 無いものはいかに  
在りえようか さらにいかに  
無くなることありえようか

### 補遺

帝大を出た君が  
国のために戦ったのは  
君の頭脳ではなく  
君の肉体だった

国が必要としていたのは  
君の知性ではなく  
君という肉弾だった  
父母が必要としていたのは  
君の存在 そのすべてだった！

昭和十九年六月十三日  
稲葉上等兵

ビルマのジャングルの中で  
二十九年の生を終えた  
彼のふくらはぎはもはや  
彼をそこから  
何処へも運ばなかった

## 海辺に棲むアデラ

北野 和博

六時間目が終わると  
僕たちは海へ行く  
砂浜でアデラは待っている  
給食のパンを渡し  
僕たちはアデラを  
まあるく囲んだ  
ゆっくり体をくねらせるアデラに  
海が波を奏でる  
金髪を風が撫で上げ  
西日が首筋に  
しつとりと貼りつく  
アデラが海なのか  
海がアデラなのか  
もう分からない  
日は暮れて

僕たちは  
砂丘を通って家に帰る  
満月が青白い顔をして  
忘れていた宿題みたいに  
ぼっかりと浮かんでいる



## 煙仲間

季村 敏夫

祈りの儀式に従いながら  
車を見送る

見送るものは遅れる  
運ばれるひとは前方  
四つ角で消える

見上げると気流  
煙突はのん気だ  
あとさきわからず  
死んだひとに見送られた

満腹食堂を出たあとも  
休業案内を通り過ぎたときも  
素知らぬ顔の空があった

のこされたものに紫陽花  
紫色のひかりなど  
どこにもない

\* 『交野が原』二〇二〇年八九号発表分、改題書き直し。

## おみくじ

工藤 恵美子

島の沖を流れる黒潮に乗って  
運ばれた種子が繁茂  
ビロウ樹の大群落  
亜熱帯のジャングル  
青島神社  
ここ宮崎で結婚のスタートを切った

あの時  
青島神社の御神籤をひいたら  
「大凶」  
不安で涙がこぼれた  
帰り道の  
二つの鳥居をくぐったあと  
夫は 引き返して  
御神籤を引き直して来た

どれくらい待っただろうか  
「大吉」のおみくじを  
私の掌に載せてくれた

あの日から  
御神籤は  
引いていない  
六十年ぶりの青島  
目に飛び込んできたのは  
境内の木の枝々に結ばれた  
御神籤の  
あふれる  
白

## また明日

だるまさんが転んだ  
だるまさんが転んだ  
だるまさんが どて

一歳四カ月の曾孫の  
壮真は  
身体を揺らして  
全身で絵本をよむ

読み終えると  
大きな声で  
「また明日」と  
絵本に声をかける  
いそいそと本棚に  
返しに行く

「また明日」  
無邪気な幼児の言葉が  
眩しい

私は八十五歳  
夫を見送って  
季節が  
一巡りした

## 驟雨

黒住 考子

急な雨だった  
あわてて近くの廂に走り込む  
突っ立って雨のカーテンをみていた  
真っ白なカーテンがゆっくりと透けてくる  
カーテンの向こうを見たいのではなかった  
ただ降ってくる雨を見たくて見ていた

私の頭に 顔に  
見上げた目に  
ことばはまるで雨の雫だ

もう終わり というように  
白いカーテンは薄くなってきた  
徐々に青空が広がってきた

見上げると  
ぼたぼた と  
ぼたりぼたり と  
ぽっぽっ と

## ねじ式

ぐっと突き刺し 力を込めて押しまわす  
一卷き一卷き 螺旋の深みへ  
隙間のない結合

徐々に引いていく  
ゆっくりほどけるままに  
流れ込む隙間

どこにかある  
あなたの一点を探しているアリゼ199号

## 島のわたし

黒田 ナオ

見おろすと  
すーっと金色の魚が泳いできて  
気がつくのと、わたしも泳いでいた  
そのうちだんだん体が透き通ってきて  
突然、島だった頃を思い出す

ああそうだ、ずっと昔わたしは  
海に浮かぶ空豆みたいな島だった

懐かしい気持ち  
体じゅうから湧きあがってきて  
海鳥の声が聞こえてくる

ほら  
繰り返す波の音

きらきら光る水平線

ここだ、ここだ、ここにいる

じっとしたまま動かない

何千年、何万年

気の遠くなるような時間の中で  
うつらうつらと夢見るように  
島のわたしが呼んでいる

## 笑う人達（仮想）

小杉 ヨウ

笑う対象が無いにも拘わらず、  
内発的な衝動にしたがって笑い続ける。  
変な物を食べてあたってたという訳でも無く  
行き場を失った衝動が自己へむかいはじめて多発的な錯乱と狂気が精神の焰となって  
笑う理由も無く、笑い続ける。  
笑いは伝染する。  
それを見た者はつられて笑う。  
やがて道幅一杯になって笑う人達が行進する。  
笑いの伝染が限界に達すると  
それを見た人は恐怖心に駆られて逃げまどう。  
笑う人はそれでも仲間を増やそうと追いかける。  
こうした現象は最初に笑った人が  
どこまで笑い切れるかにかかっている。  
中途半端に笑った人は途中で  
笑いから醒めて平静に戻るまで

たいして時間はかからないであろう。  
こうした人を生み出すのは  
きつと社会が病んでいるからであろう。  
混乱が混乱を呼ぶ負の連鎖に  
危機感を抱いた人達の中から  
自然発生的に笑う人が現れたと言えるかも知れない。  
窓の外では、今夜も笑う人達が  
一団になって道路を行進する。  
途中、笑いはじめた人達と合流しながら  
人数はふくれあがる。  
後ろからそれを取り締まろうとする人達が  
忍び寄る。  
衝突がおこらないことを祈るばかりだ。  
反面、どのような事態の收拾が展開するのか興味は尽きない。

# 風

小西 誠

匂い立つ新緑の  
葉裏に脈打つ葉脈  
赤ん坊の

掌の血管に似て  
柔らかな命を  
点滅させている

季節は  
苛立っているのか  
爽やかな筈の  
五月の風よ

ここ かしこに  
幼い子供の悲鳴が聞えて  
街角には理不尽な刃物が  
煌めいている

街角では  
モミジのような掌を振る  
幼子に乗せた  
乳母車が いま  
交叉点を  
曲がろうとしている

梅が散り  
桜が咲き  
つつじの庭には

あじさいも蕾を膨らませ  
時の移ろいを待っている

ふと思う 母の風  
暑い夏の夕べ 手うちわの風  
虫よけの香りと一緒に  
そよぐ風 風鈴の響き

荒ぶる風よ  
人の心を薙ぎ倒す風よ  
行き場のない荒野に彷徨う  
孤独な人の心を癒す風となり  
風よ 吹け

## 今ここで

佐伯 圭子

小さな羽 幼い羽  
ふわ とミニ薔薇の葉に止まっている  
あれは 空からあの子が  
おとしたもの  
漂って  
羽を付けて  
無音の便り

\*

今ここで  
ただひとり  
あなたに会う  
夜 時には朝  
雨あがりの昼間

花と遊んでいる時  
わたしのいい時間

\*

月と太陽がぴったり重なる  
日蝕の日に  
球の輪郭に現れる炎 その名のついた  
二十一世紀の生きもの  
新型コロナウイルス  
生物発生いらい 生命を助けても来た  
目に見えないウイルスが  
今 世界を走っている  
ひとのココロも走っている  
ひとを締めつけている

## 秋が

集まらない  
会えない 語り合えない  
歌えない 観られない  
会食できない

\*

ただ思う  
あのターシャのように※  
草花を育て  
ひとを思っている  
逝ったひとのことも

\*

秋が歩み出し  
ぐんぐん秋の日が歩み出し  
カンナの黄色も心なしか色褪せて  
淋しい色で  
わたしの歩む道を飾り  
わたしを見送っている  
秋が歩み出し  
その中を 細い道を  
わたしがひとり歩いている  
死者たちと  
生きているひとを  
思っている

※「ターシャの庭」で紹介されたターシャ・テューダー。  
米を代表する絵本作家。1915年～2008年

## 風

佐土原 夏江

カーテンが揺れて冷やかな風  
世界を揺るがす感染病菌におびえて  
過ぎていく日々  
マスクを縫う手元がゆるむ  
友人知人に届けて  
わたしなりの対処をつづける  
見えない相手と  
抗いながら  
生きることの意味を教えられ  
今朝 吹いてくる風  
厳しく 冷たい

## ゆめ

遠くへ吹きつけ  
舞い散ったゆめ  
澄んだ空から  
ちぎれた言葉の断片が  
ばらばら落ちてくる日がある  
思わず両手を広げ  
抱き寄せて  
しまう日がある



## 枯木立

坂本 久刀

葉を落とし

枯れてしまったように見える樹林

筈が還らぬほど透けている

もぐりこむ

踏み鳴らす枯葉は失語の明るさ

耳が澄み真顔に戻る

木立は

静寂と孤独に耐えて逞しく

沈潜した無限の美を湛えている

木にもたれるとあたたかい

しずけさを結集している木の瘤だ

オホーツクの故郷は

海の音がもぐりこんでいた

冬木の芽は

母という静けさにある

木々の芽吹く春

人の精神が

不安定になりやすいが

芽吹き心は

湧くにまかせたい

## 五十二日間

在間 洋子

食後の片づけをしながら  
見るともなく見ているテレビに  
プロイラーの養鶏場が映っていた  
防護服の作業員がタンクに飼料を投入している  
鶏の健康のために炭粉を混ぜています  
タンクから自動的に給餌されるので  
餌箱は常に満ちています  
温度管理はもちろん広さにも余裕をもたせ  
鶏にストレスを与えません

皆さんに美味しいと言っていたのが嬉しい  
三万五千羽の養鶏場の主がにこやかに語った  
仕入れた雛を五十二日間飼育して出荷します  
五十二日間！

思わず画面に見入った  
鶏たちは何の屈託も見せず餌を啄んでいる  
そうなのだ この鶏たちは  
この世に生まれ 生きる苦を知らないでよい  
老いも病も死を想っての怖れをも  
夜には眠り 朝に目覚めて腹を満たし  
コッココッコ コッコククク

ココロニコダワリナク コダワリノナイココロニ オソレハナイ  
仏様の教えを知るや知らずや  
コッコ コッコ 心経を唱えながら  
お尻を振りにわとり歩きをして過ごす

夢のような五十二日を  
カラリと揚げて夕餉にいただき  
わたしたちは平均寿命八十余日 およそ三万日  
四苦八苦に満ちた日々を過ごす  
三万日！  
悠久のかなたにい御座す弥勒菩薩の眼差しには  
結んで消えるひと粒であるにしても

## 蜉蝣の翅

紫野 京子

あなたが抱いているのは  
蜉蝣の翅 六等星の光

この世の果ての 遠い何処かに向けて  
投げられた矢

月蝕の月のように  
どんなに遠く離れていても  
影によって映える光

今 影すらもない存在の  
境界もなく き合うちに  
どんな夢を抱こうというのか

奈落に向かって  
ただ落ちてゆく日常

## この世の外

私はいつも この世の外を探し続けた  
けれどそこにあるのは 現実なのだった  
だから そこから出たひとを  
背負い続けた

決して見えない けれど  
たしかに今も ここに  
存在するひとたちを

過ぎ去るものを 追い求めてはいけない  
心の奥底に ずっと  
ひそやかに留まるものを みつめるのだ  
そこには 遠い昔から  
変わらぬものが 確かにある

## 希望

柴田 実

枝に新芽が出ると  
それは希望と  
名づけるにふさわしい  
その下を  
ピカピカの一年生が  
ランドセルを  
鳴らして通る  
二つの希望が  
交じり合う  
五月になると  
一年生の肩に  
ランドセルがなじみ  
青々と葉を広げる木の下を  
ランドセルが走っていく  
希望は  
成長する

## あすなろ

麦秋になれば君のことを思い出す  
君は「あすなろ」という集いをつくり  
明日の短歌をめざした  
自宅に塾のような部屋をしつらえ  
若い人を集め無料で教えた  
高齢化する歌人の  
次を担う人を育てる  
この高邁な思いのもと少年少女が学んだ  
だが、病は秘かに君の体を蝕んでいた  
君は骨髄移植に望みを託したが  
完全な適合型が見つからなかった  
君の体は日に日に衰え  
麦秋の日に帰らぬ人となった  
加茂の里麦秋の火は燃えさかり  
歌の道継ぐ君帰らざりき  
「あすなろ」という  
教育者の熱い思いが  
参列者に伝わった

## ものがたり

関  
はるみ

古寺の木造円柱  
真昼の太陽は反射しない  
柔らかに吸収  
木目の波が打ち寄せる  
天平の宮大工の気配が  
悲壮なまでの精神  
木を組む人の心が  
その間に光を湛えて  
寄りかかりたい  
触れてみたい  
ゴッホの厚塗りの絵の具  
その質感の危険な誘惑

反り橋の下  
緋鯉 まだら鯉ゆうらり

水をくぐり抜ける  
荒い呼吸づかい  
池の中に漂い  
女の子の変身 白い腹が跳ねる  
いつか落命したあの子  
父母の家あたりまで  
雨月の夜の

日もすがら老人は  
積みあげた知識  
やりとげた技術まで  
思い合わせる事もなく  
ある日  
忽然と執着から離れる  
秋の日は暮れやすく  
切り落として太陽は沈む

何を忘れたかもわからない忘却のまっ暗闇で  
 太い声が鈍器の重さで襲いかかる

さあ いえ お前は一体何を自白したのか  
 どうせ お前は死ぬのだから あきらめろ  
 少しでも楽に死にたいのなら はやく いえ  
 いったい お前は どれだけ自分で裏切ったのか  
 そこに われわれの生死がかかっているのだから  
 いえ われわれの何を どれだけ敵に売ったのか

何も覚えていないので 何もいつていません

何をいつたのか 思いだせないのなら 思いだせ  
 苦しいことなら忘れたいだろうが 思いだせ  
 そこに われわれの生死がかかっているのだから  
 いえ 相手にはうそをいつて騙したとか いえ  
 思い出すまで 苦しめてやるから 思いだせ

何も 思い出したくありません だからいえません

何か覚えているだろう なんでもいいから 早く いえ  
 思い出したくないというからには 覚えているはずだ

ただ 今いえることは 死と忘却の関係だけです  
 苦しみの中でできるのは 忘却だけです  
 たとえ 死んで生きかえったとしても  
 何も思い出せないので  
 死にそこないは 何もかも忘れてしまうのです  
 わたしは 三回死にかけて 人生に三つの暗黒がある  
 もう 次に拾う命は残っていないはずだ  
 死は 永遠の忘却以外のなものでもない  
 もう 目覚めたくもないから さっさとやってくれ

そうなのか 何も思い出したくないのなら そうしてやる  
 そういつて あいつは わたしを沈めて埋めた

もう 苦しみは 二度と思い出したくありません  
 思い出したいのは何も知らない人だけです

今日も 太平洋は キラキラと何事もなく輝いている

## 牢番

その独房はずっと昔には瞑想のために掘られた洞窟であつたらしく  
 ほぼ垂直の断崖には、同じような眼窩の形の闇がいくつかみえた  
 はっきり残る独房は二つ三つばかり

このあたりの熊を生け捕りにした時の檻の鉄格子を二つ繋ぎ合わせて  
 谷底を覗けるようになっていたが、鉄格子は囚人が谷底に落ちないためにあるのか

触れば一緒に落ちるのか、空は恐ろしく青く輝いていた  
 この空に囚人は殺されるのだ

囚人を閉じ込めているのは恐怖だけだった  
 何も語らず動かなければこの位置が一番安全であり  
 世界に閉じ込められていると思えば、独房もまんざら悪いところではない  
 かすかな闇が囚人を救っているのだ

閉じ込められているのはむしろ牢番ではないかと囚人は思った  
 生きているのか死んでいるのかわからなくするのが牢番に勝つ方法だ

牢番は一日に一度畑仕事の後で洞窟の上に行って頭一つ入る竅穴があり  
 そこから食器を引き上げると入れ替えの食事を降ろす  
 顔を穴に充てると蓋の代わりになり中の風景は鮮明に見えた  
 食事風景をだらだらと見て過ごし観察記録を残すことは

牢番の仕事であるが、囚人の代わりに日記を書いている気分になった

囚人は語りかけても何の返事もしなかった  
 少し動いて見せることだけが  
 生きていることが全てだという合図だった

八月の部屋でそれが特別に譲られたものとして足で立っている。それは未来を託すものではない。部屋のどこでも占有を許されて、わたしたちの意識の立ち入ることができない過去のものたち。その本質を好奇心から確かめようとしがちだ。例えば素朴ながら支点を想定して、片方にそれを入れてもう片方に重さを加える天秤ばかりを思いつくが、棹（そのものの科学的誤謬の織物のために）の両方にある力学的物質には演繹的な疑いが生ずる。わたしと言われる空間的質量が改めて問われることがないように、部屋に空間を現働化させる物質的意識を想像できない。それは家の隙間にある冷蔵庫や家具の類と同じ性質ではない。テーブルを置き、座布団を用意するような、わたしたちがそこに譲るものとして存在した。かすかな空気の流れや、滞留する密度感を鋭敏に感じる首の皮膚が親密な関係を築くものではない。語らない、それは同時に心理的な鏡の面を持つ。それは畏れるもの。元素的には空気と呼ばれるものに近く、八番目の月にそのため部屋を譲る。時には焰のようにゆらめくこともあるが、最近では、それは歌の好きだった鳥に近く、太陽のような真っ赤な血の球体だと思ふことがある。

## 21世紀の迷路

たかとう 匡子

人みな後退さりしながら歩いている

反転する

迂回する

気持ちの余裕ないまま

一夕にして身が重たくなり思わずおののいた

とはいえ

人は生きなければなりません

追跡してくるそのものの正体不明

詩句をひねくりまわしたとてどうしようもなく

たったいま弥生の分水嶺を渡ろうとしている

天空を流れる天空の

よく見えないあたり

季節の梯子がはずされ

単語は音節から見放され

世界中

激震！

街道は網状に入り組んでいる

さらに先へと進んでいくと

暁はもののみごとに翼をたたくで眠っている

円周のむこう側に出る道は見えず

どこからか脈絡のない声

そのことごとくにあだ花咲き乱れ

せめてその内奥へ入り込もうとして拒まれた

喋ろうとしても

咀嚼筋が引きつっていて

どの花の下にも

それとわかるほどの小さい人が座っていた

さっきの声の出所はここだったのか

目をこらすと

声といっても不透明で

しぶとくざらつきながら要心ぶかく

匍匐前進

伝搬するのはどこまで

人みな回路わからぬままに歩いている



## カイゲンの町で

高橋 夏男

隣室でテレビを見ていた家人が

レイワと決まったよ

冷たいという字みたいなレイ と言う

なんじゃそれ わけのわからんレイだと

のぞいてみたら 令和 だった

ほくも 冷たいという字みたいなレイ に共感  
それに加えて 命令の令でもあると思った

スーパーやコンビニからホームセンターにまで

令和を冠した商品が並ぶ

愛飲するドリップコーヒーは

安価なので対象外だ ポイント3倍もダメ

戦争の昭和と焼け跡の戦後から  
自然災害の平成へ

戦争好きの首相の下

レイワのレイが カイゲンレイになったり

天皇と臣民 になったりしないか

さて 後期高齢者のほく

間近い相続税を案じているのだが

皇位継承も相続のうちながら

天空はるかな雲外では

皇室ブームに祝い沸き立つなか

壮麗豪華な祝典がつづく

わが町の老人会も

お祝いのゲートボール大会というから

せめてわが家も十連休の一拍旅行

ビジネスホテルがやっと取れた

## 角行

高橋 富美子

1

山里にようよう花の便りがとどけられる春浅い季節。うそ寒い夜あけの薄くらがりのなか 難産のすえ異形の赤ん坊が産みおとされた。泣き声をたてない嬰兒の背中にはほんやりと角の字形のような紫いろの痣がうきあがつてみえる。姑は習いにしたがいそれを白い布につつんで裏山の沼に沈めた。

蛙が鳴く沼はアメンボウのほそい脚や ひらひら泳ぐメダカのひれごしに青い空を雲がわたってゆく日もあり 雨が水のおもてをたたく日もあった。そうした沼底での日々が明け暮れ何度めかの秋のこと。台風くずれの大雨がふり 平穏な沼のなかに濁流がなだれこんで水があふれ流れた。

雨あがり 明るい陽ざしに目ざめると汗ばんだちいさな掌のなかにいた。「こんなものが落ちてたよ」男の子は履きものを脱ぎすて家のなかに駆けこんだ。祖父は「ふしぎなこともあるもんだ」とい

い 部屋にあった手づくりの駒箱をあけてみせた。角が一枚たりなかった。老人は縁側の将棋盤の上に駒を並べはじめた。固唾をのんでそれを見ていた男の子は祖父に習って 握りしめていたものを升目の角の位置に置いた。

2

飛んでいる。雲ひとつない空を。翼をひろげ風に乗りなだらかな山を越える。深い谷底にしがみつくように集落の営みがあり そこから峠ひとつむこう ぼつんと見える廃屋に涙目の婆が住んでいる。裏山に瞳の濃い沼がみえる。滑らかな水の無数の腕に抱かれて眠ったあの頃のことかむしろ懐かしい。

北西、つぎに北東へと指令がくだる。今は飛ぶのだ。定められた方角へ。明日は南西にそして南東へ。岬の突端を過ぎればどこまでもつづく海原があり。そこを越えれば馬の字形になるといふ。なれという。

(続駒袋 作品Ⅱ)

## 七十五年目のメッセーヂ

たかはら おさむ

伝えておきたいことがある…

七十五年前

ぼくは 国民学校一年生

ピッカピカの一年生

そんな気分ではなかった

クウシユウケイホウ ハツレイ!

轟音とともにB 29の編隊が襲来

逃げ惑う

その時がいつ何時やってくるか

授業中 登下校中

一家団欒のひと時

真夜中

恐怖

その時を

身をかがめて耐える

子供心に思った

「戦争はイヤだ!」

敗戦

静かな空が戻った

陸軍 海軍 空軍

兵隊 軍艦 飛行機

それらをもたないと決め

再び戦争の惨禍を繰り返さないと誓った

憲法 第九条

ぼくらは教わった

「…しみなさんは、けっして心ぼそく思うこ

とはありません。日本は正しいことをほかの国

よりさきに行ったのです。正しいことぐらい強

いものはありません。」

(『あたらしい憲法のはなし』文部省)

…しかし

海の向こうで戦争がはじまった

「国を守るため」

軍備がはじまった

警察予備隊 保安隊 自衛隊

曰く「必要最小限度の実力」

曰く「専守防衛」

そのために「迎撃ミサイル」

いや「敵地攻撃能力」も

…いつか来た道

昨日の敵は今日の友?

「日米安保条約」

「日米共同行動」

「集団的自衛権」

立派な軍事同盟

曰く「これは〈血の同盟〉です」

米国の戦争を一緒に

忘れ去る忌まわしい過去

加害者は忘れない

被害者は忘れない

大日本帝国皇軍の仕業

言葉 主権 民族の誇りを奪われた朝鮮半島

「殺し尽くす・奪い尽くす・焼き尽くす」

ぼくは聞いたのだ

現地で彼らの怨念を

「日本人に伝えてほしい」と

花束を捧げるだけでは済まされない罪業を

ぼくは心に刻んだのだ

ぼくは見たのだ

「赦そう だけど 忘れない」

そう刻まれたプレートがあった

たしかに ヒロシマ ナガサキ オキナワ

そして 本土空襲…

ぼくらは被害にあった

でも その前にあったことを…

七十五年目の 今

25年前、国生みの島から地球が震えた。一瞬で崩れた母の美容室。一階には大きな鏡台と真っ黒な鬘を乗せたマネキンの白い首が幾つも向かい合わせに置かれていた。

どうしよう。

子どもの頃、鏡の中に鏡が映るから夜ひとり通るのが怖かった。鏡には鏡が映る。同時に映る小さな僕。その僕自身を見ているさらに小さな僕。無限に続く僕たちの列。

その中の一人が見たことのない表情で手を伸ばしてきたら。

心配は、恐怖を引き連れながら心臓を揺さぶる。見知らぬ誰かが近寄って耳元で囁きそうだ。

本当のお前が出てくるぞ、と。

毎日、どこかで僕たちの〈ふつう〉は消え続ける。地震に揺さぶられなくても、ゲリラ豪雨という名の災厄。老いた右足が突っ込ませる四角い鉄の死。誰でも良かったと振りまわされる光の刃。いつの間に布告されたのだろうか。失われることでしか〈ふつう〉の価値がわからないという決議が。

どちらかが真で片方は嘘だったのか。

一線を踏み越えて道路で鉄の死を配った足の高齢な持ち主もかつては成人式の若者であった。誰でも、と眩き、路上を赫く染め尽くした無表情な若者も、二十数年前は笑顔の赤子であった。あの日始めた祝祭が誰かを終わらせる災厄になると誰に予想できたのか。近寄ってきたそいつは尋ね続ける。

どちらが真で片方は嘘だったのか、と。

生きている〈ふつう〉と失われる〈ふつう〉の違いは。今、道ゆく人は誰一人、足を止めない。片手に持つ磨き抜かれた小さな鏡面に眼を縫い付けられて、顔を上げる者は誰もいない。鏡の裏側にゴルゴン姉妹の白い顔と蛇髪を隠されていたかのように誰も視線を動かさない。マスクをした顔を誰一人空へ見上げることすらしない。温暖化した天にとってはほんの俄かなかき曇りで全てを無慈悲に押し流してしまえるというのに。車だろうと家だろうとソーシャルディスタンスなどと横文字で飾ろうとも。全ては無意味で無防備。無教養かつ無神経、無反応かつ無所属。融通無碍手持無沙汰悪逆無道無差別殺人荒唐無稽。続けられ、ひたすら落ちてゆく無の連鎖。だから、そいつは詰問をやめない。

今、流れたテロップを見たか。感染者数を見たか。パチンコ店でばら撒かれるナノメートルの災厄を見たか、と

僕はふと思い出す。あの小さな僕たちとマネキンの黒鬘と粉々に壊れた鏡の破片たちを。崩れていく僕たちの粉々の〈ふつう〉。

## F君のこと

田中 信爾

F君という友人がいた  
最初は私の下宿へ来た  
突然彼は来た  
下宿を変ると  
彼はまた来た  
そんなことの繰り返しで  
彼も私も職業人になった  
それなら  
彼は私を利用しただけなのだろうか  
彼が教えてくれたもの  
それも少しはあったと思う  
彼はもうこの世にいないけれど  
もう一度会って  
「君は僕のことどう思っている」  
と聞いてみたい。

## ラ・フォンテーヌの寓話より

蟬と蟻

イソップ寓話集より取られたもの

一夏歌い続けた蟬

働きものの蟻

ラ・フォンテーヌ寓話集最初の作品であり

教訓話としても読めると思う

ラ・フォンテーヌにとっても面白い話だった？

## 夢も見ぬ長い眠りの日に

田中 莊介

咯血したステイヴンスンは  
かけつけた妻に向かって  
紙にこう書きつけた

「恐れるな。これが死なら楽なものだ」

「光と風と夢」で

中島敦はみずから重ねて

「宝島」の作者の事を引用している

死とはなにか――

多くの人が前世や来世のことを

見てきたように喋ってきた

語ってきた

安心のためあるいは恐怖のため

死は粉飾され 死後の世界は

豊かになり

首長は巨大古墳を造り  
江戸末期の庶民は  
小さな石の墓を造る

ダーダーダーダースコダーダー  
いっぴきの醜い鬼が  
狂ったように舞って舞って  
闇の中に消えていく

## お腹

武内 健二郎

小学校一年生の時だった

僕は友人に

赤ちゃんは母親のお腹が割れて出て来るのだと主張した  
女の子の体に関する僕の知識を総動員して  
そう結論した

どういう風に割れるのか

ただそれが謎だった

友人の納得し難いという表情に応え

僕は妊婦の突き出た腹から赤ちゃんが出て来る様子を  
幾度も想像した

痛みもなく血も出ず腹が縦に割れて

扉を開くように赤ちゃんが出て来るのだろうか

花のように腹も開くのだろうか

割れた腹はどのように閉じるのだろうか

僕はナイフで指を切った時のことを思った

友人は犬の出産の場面を見たことがあると言った

僕は人間と犬は違うのだと言った  
とにかく人間はお腹が割れるのだ

人間であることの謎が

腹のあたりにまわりついていた

時は流れる

謎は消える

人間について

少しは学んできた  
が

贈り物のように

田伏  
裕子



## 五月二十三日通り

玉井 洋子

まんさくのあたまにあざみの穂綿からがり  
さつきの上にしらんがのびる  
剪定された枝々から  
燃え立つ新芽

ビジーだった五月

どこかに影を忘れてきたようだ

捨てにいった母より

捨てられたたまが先にもどって

居ついて

いなくなつて

気配を殺し

ひっそりと咲くなつたばき

実のとげとげしさに傷ついて  
後ろ手に隠したのは  
たまの手  
かあさんの爪

山に向かう

海に向かう

どこへも向かわない

影

一つ

詩集「戦争を食らう」より

## 海を越えて来た手紙

玉川 侑香

トウアン 日本から手紙です

ガレキの中で立ち尽くしているおれに  
興発の事務員が

シミだらけになった茶色い封筒を手渡した

波を被ったか 汗がしみ込んだか  
長旅が思われる

差出人を見た瞬間

不覚にもおれは はらはらと涙した

妻からだ

この大空襲の最中

太平洋をまたぎ

よくぞここまで辿りついたことよ

「アンボン市楽園通り 南洋興発内 深見三郎様」

だが 妻よ

もう その建物も「楽園通り」もないのだよ

みんな 破壊されてしまった

でも おれは生きている

須磨子よ

確かに 手紙受けとったぞ！

おれは生きとうで！

おれは中身も読まずに胸のポケットにねじ込んだ  
たよりがきた

それだけで よかった

アンボン行き郵便の暗号

セニ四七四〇七〇〇

検閲の印もなく

内地の混乱が うかがえた

## 月はいつも突然に

田村 周平

朝 新聞をとりに行く  
コーヒーを飲みながら  
ハイライトを一本  
これ以外に  
何があるだろう

夕暮れには  
小さな居酒屋のカウンターで  
焼酎の水割りを  
これ以外に  
どんな人生が

また一日 もう一日  
すくなくなっていく一日  
僕は毎日  
土の中に埋めていく  
生活のかけら  
それ以外に

何があるだろう  
僕に残すものが

月が出ている  
月はいつも突然に現れる  
まるで僕の後を付けて来たように  
夜の空気が  
少しだけ明るくなって  
月の光で僕の身体も  
すこしだけ軽くなって

こんな夕暮れには  
酒精に会いに行くのさ  
そこで僕は誰かと話したのか  
誰とも話さなかったのか  
少しだけ軽くなった魂のかけらを  
土の中に埋めて帰るのさ

## トンネル

入学祝は腕時計と万年筆  
時を数え時を書き止めよ  
という事だったのか  
中学生のほくは  
分厚い三年連用日記も三日坊主  
時はあつという間に過ぎていった

通学電車の同窓会  
という企画があった  
そうすれば男子校のほくも  
君に会えるかもしれない

電車がトンネルに入ると  
窓に君の顔が写る  
君の窓には

外を見ているほくの顔が  
トンネルをぬける一分間  
ほくは息をしていなかった  
学校のある駅まで  
トンネルは二つしかない

実らなかつた初恋の  
墓標のような  
電車は今も走っている  
見知らぬ若者をのせて

## ごめん

月村 香

ごめん、だからごめん、baignoire (浴槽) に似たdivan (ソファ) のところからごめん、ニーチェのようにごめん、スタンダールのように、ごめん湯船が冷えてしまうまで自分を見失っていてごめん、着替えが見つからずまた君を待たしてしまってごめん、さつきから声が震えるんだ、それだけだとしても、ごめん頭に浮かんだことが変な絵のようにさえ映らないんだね、ごめん口にするとあぶくになってしまつてごめん、馬鹿の総代でごめん、だから本当は愛してなどいかなかったと君に言わせてごめん、すべてはひとときのことだからもう構わなくていいんだ、ごめん、もともとぼくは恋愛には疎いみたいだそれさえも気づかなかつたし毎日月の形を見にバルコンに出る小男なんだ、ごめん、きのうそばにいた君が風呂から出るといない不在とはアップサンスと言うねそれは知っていたさういうことばには詳しいんださういうことばに好かれるんだことばが寄つてきて君と生活をしてた気配を感じていることがあたり前だったけどぼくは未だプレザンスなのに君は急にことばの意味すら忘れてしまつ

て、と男が雛菊のように泣き出す「男が泣く」なんてバナルな表現バナルすぎてまたバとバとバばっかり重なり合つてそれでも平気で泣くのね男は肩から尻まで届く寝巻をブツブツ言いながら取り出すと一瞬反撃に出るかのごとく女に言う「君の髪は体と同じ匂いがする」そうしているのだからそうだわ」その時女の本性は無機質だったからたぶん無機質の香りがただただ遠くに見える本日の日課表に書いてある①朝はバナナを食べる②フランス語の小説を読む③君とぼくがどこかを歩いている④きつとどこかでお互いがお互いを馬鹿にする以上暮しつてそんなものだわ女は平気なんだが男はこだわる一体風呂の中で何を考えているのか、どちらが精神であり肉体であるか不明下においてその女Aはその男Bは髪を乾かす女のドライヤーの音で女の耳は遮音された、聞いておくれ、ごめんごめん、鳥を放してしまつたよ、そう君は悪くない、ごめん、女は聞こえない

註：baignoire (仏) ベニョワール

divan (仏)

デイバン

## 待つ

辻岡 真紀子

「ねえ、結婚ってどう思う」

老人ホームに伯母を訪ねた帰り道  
立ち寄ったマクドナルドで  
隣席の女子高校生の会話がふと耳に入る  
卓上に「高二英語」の教科書を広げている  
息子と同年だ

「私、料理そんなに好きやないし  
ご飯作って待つてる生活とかムリやわ」  
「自分の人生をあげるんやで」  
「だから、こんな気持ちをおわかってくれる  
がいいねん」

あの夏の夜

はまさにご飯を作って待つていた

昭和六十年八月十二日

「JALの最終便で九時頃帰る  
ちよつと遅いけど夕食は家で取るよ」  
言い残して東京日帰り出張に出た  
伯父の帰りをいつものように  
子どものいない夫婦二人だけの食卓  
しかし伯父は帰らなかった  
空席が出て  
一便早いあの飛行機に乗ったから……。

介護付老人ホームの一室で

今日もは待つている

「潤子伯母ちゃん、私よ、マキコです」  
声をかけても目を合わせることなく  
電動ベッドの上で天井を見上げたまま

「お帰りなさい」

ひと言呟く

店に差し込む西日が退いていく  
私は時計を見て立ち上がった  
午後五時  
夕食の支度をしなければ  
家族が帰って来る  
「ただいま」と夫が息子が  
毎度代わり映えしない料理を

楽しみにして帰って来る

制服の少女たちは  
冷めたフライドポテトを傍らに  
プリントの山と格闘していた  
鉛筆の音が耳をつつく

店を出た

外に夕焼けが待つていた

日付が変わる四分前、私鉄N駅方面へ急勾配の坂道をあがっていくバスの最終便を見送る。ペランダには夜風に風呂上がりのほてった身体。風邪をひきますよ、声はどこからもかからない。鳥たちの啼はどこにあるの。山に繁る樹の上で眠るのだろうか。鴻雁来る、菊花開く、蟋蟀戸に在り、霜始めて降る、霎時施す、楓蔦黄なり……厨房に貼られた二十四節気・七十二候の暦は軽快に時間を進めていくのに秋の気配が乏しかった。砂丘のある町から大型トラックで早朝やってくる梨売りの老夫婦の声はなく、畑の畦道から曼珠沙華が消えた。おやおや、赤紫の萩、風に揺れる秋桜、雨後の毒茸、女郎花だって手を振ってましたよ。バス道や公園や、小さなお山が見える場所まで、遠征して遊歩しているのでしょに、あなた、何を見ているの？ ほら、階段を下れば、足元にドングリが。

嘆き節の接ぎ穂を断ち切って、播州織のマスクに、同じ柄の上着を着て、薄が原行のバスに乗りこんだのは、老婦人だ。小さく波打つ背中に、どちらへと、無言の問いを投げかけて、まぶたの裏で吾亦紅を手折る。大半の燕が南に向けて飛び立ちました、白い野菊が駐車場の裏に楚々と美しく咲いています、幼稚園の坂道のコバノガズミが赤い実をつけています、便りを届けてくれたひとの文字が浮き立つ。野菊を見にかけたのはひと月もあとの

ことだ、見つからなかったなんて言えない。秋の輪郭がひとひとのあいだで大きく揺れている。

日付が変わった十五分後、坂道から下ってくるのは、N駅からひとつ東のY駅方面への深夜バスだ。湯冷めしないようになんども深呼吸して見送る。空飛ぶ猫バスは来ないの？ 通常の二倍料金を払ってバスに乗りこんだ男が、影を部屋に残したまま、戻ってこなくなつて七年だ。脱ぎ捨てられた影は反乱など起こさずに、浴室で童謡メロデーを夜ごと陽気に唄いつづけている。

街景のイルミネーションに手を伸ばす、ラジオ体操もどきのストレッチにはげむ。歩道の向こうの高層マンションの窓をながめる。月が笑う。ちくちくと夜風が肌を刺す。室内に明かりがついているのはいつも角の決まった窓だ。あの部屋には孤独な男が匿われているのだろうか。巣箱のこちらからあちらへ、空間移動してAがQと入れ替わったのか。通路側の灯は巣箱の住民たちを、一晩中柔らかい明かりで保護・あるいは監視している。一ヶ所だけ煌々と橙色に輝くのは、駐車場から玄関へと抜ける通路だ。車から降りた影たちが、次々と光りに吸いこまれて、硝子の部屋に戻っていく。ここで、この巣箱で、越冬するの？

## 白い風の実

時里 二郎

雨季のしろい風の実を  
てのひらに載せて  
涼やかな息の緒が  
小さなうずをつくる  
その淡いあなたの温熱を感じて  
目覚めた夢のほうからにじみだす  
なつかしい薫香をききながら

縞の荒れ寂びた祠のわき  
みそぎ川の小さな流れを  
ふるえるようにのぼる  
小さな二匹の魚が  
離れないように  
流されないように  
ふたり 手を握って  
見つめている

それから  
ふたりでめぐった場所の名を  
ふたりで言い合って  
ふたりがさいごにとっておいた  
その島の名を  
あなたは言い  
わたしは口をつぐんで

そのかわりに  
あなたの息の緒を継いで  
わたしの口にうつす

それがほんとうにあったことなのか  
あるいは さっきの夢のにこぼれた  
に揺らいだ言葉の水の輪

ふたりして通ってきた雨季のしろい道の向こう  
まだ出会う前のあなたが途方にくれている

## てるみ

中堂 けいこ

ミルクが唇からながれこみ  
咽喉をおちていく  
五臓の壁から六腑にしみるまで  
わたしは走らねばならない

やがて白い液体が血肉にゆきわたり  
あなたの指先を温める  
光がほんのり爪さきにともるとき  
わたしにいう

藤棚の下のあなたを覚えていると  
葉葉のかさなりに瞳をこらし懸垂棒のかたわらから中庭をぬけ  
角になった校舎の窓でミルク瓶をかたむけていた  
ながくながく視線をつなげいつかはうしなわれる身形のかたむくさまを  
覚えていると

声を文字にのせふたたびしたためるさまを 覚えていると

走るあなたの背中から  
わたしの視線が白い顔をした  
ミルクのしずくになって  
おちていくのだと



ころなが ころなに

永井 ますみ

一月 中国の奥地から遠吠えが聞こえる  
あれは呼狼嘆の声か  
正体をさがせ  
身をかくせ

世界を廻遊する船から  
航浪波の軋みが聞こえる  
船内隔離せよ  
一人も降ろすな

ころな禍が鍋に変わると  
弧炉菜鍋  
自転車で注文の品が届く  
人との距離を置くことが肝心  
隔離された部屋でぼそぼそと食べる

でも ころなの上に娘が座るとすてき  
娘ころなの 咳き込む背なに手を伸べて  
サージカル・マスクは嚴重にしているけど  
看護師の優しさを隠しているわけではない

ころなに父が入るともつと優しくなる  
ころ父な  
そこに仕掛けがあるぞ  
目をつぶって跳ねるだない 転ぶな

ころなに婆が入ると関西弁で偽悪的になる  
ころ婆な  
皆が期待して見てるぞ  
おまえはきつとそこで転ぶと

ころなに兄が入ると気分一新  
ころ兄な  
これは今だけの距離  
お前が嫌われているわけではない  
もうちょっこし待つだが  
世界に出て行ける時はきつと来る

## 五平餅の思いから

中川 道子

街道の小さな茶店で食べた  
五平餅の味が忘れられない  
しっとりとした味噌とゴマの風味が

思い返すと

ひとつの絵に とりつかれたように  
あの地へ行ってみたい  
あの宿場町の道の曲り先は  
どうなっているのだろうか と

友人も同じ思いでつき合ってくれた  
絵は度々観に行っているが  
ここまで心を動かされたものはなかった  
シスレーやコロアの  
美しい空気感は心に入りこんでいる  
うら淋しくて人恋しい風景から  
不思議な思いを呼びおこされる絵だった

夫の祖父が

会社の視察旅行で

人生最高の時期に

突然不慮の死を遂げた土地

以前 ぼんやりとは聞いていた

コロナの自粛生活で

生きてきた時間のフィルムを

ゆっくり巻き戻していると

あの絵に引き寄せられた謎が

浮かび上ってきた

若い日 一枚の絵からの旅が

何十年もたつて気づかせてくれた

そして何かが結びついたのだ

五平餅と共に

今年も盂蘭盆が もうすぐやってくる

## 握手

中島 友子

通路に伸びてくる  
もみじと  
通るたび  
握手をします

施設で  
手を伸ばしてこられる  
おばあさんと  
同じように

## 旅の途中

通路に伸びたもみじの枝  
まだ繁るもみじの葉に  
落ちた花みずきの枯葉  
取ろうとすると声が聞こえてきました  
「クーラーの熱で大変だったけど  
隣のもみじ君が長い手で

陰にしてくれたね ありがとう」  
「花みずきさん 白とピンクの花ありがとう  
鳥さんに僕の友達だって自慢してたんだ」  
少し風が吹いてきました  
枯葉はブランコになってくれたもみじの上で  
ゆうらゆら  
秋の風に身を任せ  
まどろみ始めたようです  
旅の途中で一休み  
私はそっと通り過ぎました

## enough

思いが伝わらない  
相手も思っているだろう  
自己嫌悪  
自己叱責  
心の底では  
他者嫌悪  
他者叱責  
心がもういっぱい  
enough  
心を外へ  
一歩外へ

## 家族の思い

話せた頃  
車椅子に乗ることを  
あんなに怖がり嫌がっていたのに  
言葉が出せなくなったら今  
さっと押されて  
あつと言う間に  
運ばれていく  
荷物のように  
その手際のよさが  
悲しい

## 連絡帳

明日 持ってくるものの欄に  
がんばるきもち  
と晃太郎は書いた

## 廊下

中嶋 康雄

廊下は懐かしい

廊下はもうない

廊下など無駄なものと廃止され

廊下が無駄なものかどうかは

ほんとうはわからない

風が吹いて雨が降る

傘もささずに濡れている

「そういえば廊下があったね」

アイスクリームを食べながら言う

慌ててそれを取り上げられて

口の中の味さえ奪い去られる

いない友だちが

ない廊下を走ると

いない先生が注意をする

どんな話をすれば許されるのか

どんな格好をしていればよろしいのか  
ない廊下の奥で

禁じられたもやもやが揺れている

もうなにも学ばなくていいらしい

もうなにも考えなくていいらしい

なにもでもない破片に

ただただ従えばいいのだと

わんわん吠える

もやもやと現れては

すぐに使い捨てられる

見えない犬の

見えないうんちを踏んでしまう

もやもやした出口を指さされ

ないはずの廊下に立たされてしまう

となりに立っている奴がいる

苔が随分生えている

苔の隙間に

算数の宿題が落ちている

拾ってみると藁半紙だ

かえしてあげようにも

手がもうないという

もう

いらぬのか

いつから

いらなくなつたのか

なにも返事はなく

死ぬまで

## 生きている者は

なす・こういち

目を瞑ると  
静かに ほおを風が過ぎてゆく  
再び 目を開けると  
そこに  
ほくにしか見えない  
君が  
立っている  
久し振りだなと  
声をかける  
お互いに  
30歳を過ぎた頃だった  
朝起きて 俯せになり  
煙草を吸おうと 頭を上げ  
そのまま垂れて

君は 逝ってしまった  
生まれて間もない男の子と  
若い奥さんを残して  
全く 不意に  
ほくにも 娘が生まれた頃だった  
仰むけに 寝かされ  
天井を向いて 娘は 一日中  
ぶっぱあ ぶっぱあ と  
つぶやくように声をあげた  
何だったのだろう  
あの声は  
やり残したことがいっぱいあったろう  
まだ 生きたかったのに

みんな そうだった  
閃光とともに蒸発してしまった人  
密林で餓死した兵士  
焼け跡に  
ねずみ色にふくれあがつて  
倒れていた母と子  
生を全うできなかったのは  
君と同じだ

ぼくは まだ生きている  
生きている者は  
生き続けなければならぬ  
それは 義務かもしれぬ  
生きることに ついて考えながら  
いつまでも  
わけのわからない淋しさに  
包まれて

## マスクを縫う

西海 ゆう子

大流行の新型肺炎に脅え入手困難なマスクを縫った  
利潤の少ない工業生産は海外に移り店頭からマスクが消えた  
縫いながら戦争中に子ども時代を過ごした女性は  
防空頭巾を作ってくれた母を思い出したという  
気に入った着物地だけど贅沢は敵と中に入れられた綿は薄く  
学校で座布団の役目も果たさなかつたと  
母が夜なべして作ってくれた子どもたちの為の防空頭巾  
そして町で白いマスクを見ると  
白いカッポウギが思い浮かび背筋がぞくつとすると  
この人にとって白いマスクは防空頭巾へ戦争へと繋がって行く  
隣組という官制監視が自粛警察となつてまた蘇り  
罵りがネットで容易に拡散して行く

防空頭巾の時代から女の地位は変わったのだろうか  
手には頭巾に変わりマスク、縫い手はそのまま

あれから母の解放は確かに進んだ、出生率が下がったゆえに  
あれから妻の解放も確かに進んだ、未婚率が上がったゆえに  
しかしそれは女が自由を得たのではなく、金さえ儲ければの世の中  
格差はますます拡がり七人に一人の子どもが貧困という  
それはとりもなおさず女の貧困

シングルマザーはその少ない賃金で子どもを養育せざるを得ない  
平均して女の賃金は男の七割

離婚した父親の大部分は養育費を払わず逃げ得

思えば災害は誰にも平等に降り注ぐのではなく弱者により厳しい  
不況でまず首を切られるのは圧倒的多数の非正規労働者である女たち

敗戦前閉ざされていた女の間らしく生きる道は果たして開かれたのだろうか  
価格は高騰したがマスクはようやく店頭に並ぶようになった

そのうち値崩れを起こす、資本主義の世の中ゆえに

手作りマスクは高価だがそれは女の手仕事が報われたのではない

巧妙な権力者たちの罠に貶められたまま

相も変わらず女・子どもは常に軽んじられている

この国はいったいいつまで道に迷い続けるのだろうか

## 空っぽの椅子

西村 好子

茶色の革の深々とした椅子  
夫が読書したりCDを聴いていた

夫は全集買いだった

岩波版『日本古典文学全集』二種類、『萬葉集注解』二種類  
『露伴全集』『泉鏡花全集』『森鷗外全集』『芥川龍之介全集』  
『定本柳田國男集』『長谷川如是閑集』『吉川幸次郎全集』  
『漱石全集』二種類『萩原朔太郎全集』『荷風全集』『阿部次郎全集』  
『モーツァルト大全集』『ゴヤ全素描』『ルオー全版画』  
『三木清全集』『奈良六大寺大観』『大和古寺大観』『岩波美術館』  
『日本仏教史』『岩波講座日本語』まだまだある  
子どもが昆虫採集に夢中になるような収集癖  
吐きそうだった

ある日

漱石参考文献がダンボール一箱届いた  
読まれないでただ置いてあるばかり  
本たちが可哀そうではないか  
夫の幼児性を変えることはできない  
私が読んで書こうと決心した

三十年後

仏壇にそっと  
拙書『やさしい漱石』を供えた

属すると言いうこと

にしもと めぐみ

空を 見上げると  
小さな鳥の一群が舞っていた  
多分 雀だろう

ひろがったり  
旋回したり  
波のように 寄せたり返したり

集団は  
群れて  
動いていく

よく見ると一羽だけ  
羽の色がちがう鳥がいた  
人に飼われていた文鳥か何かだろう

鳥たちは  
区別することもせず  
集団で飛び去っていった  
はぐれ鳥が一羽  
群れと共に進んで行く  
はぐれ鳥は 私だろう  
その懸命な羽ばたきが  
今も  
目に焼き付いている



## お水を一杯

野口 幸雄

余命二ヶ月です 医師が言いました 全力で看病しましたが夫は駄目でした 死なれてみれば もっとしてあげる事があったのではと

何もする気にならない 何をしても面白くない 生きていてもしょうがないという暮らし

水を一杯頂けませんか 窓の外から声がする 顔色が悪いわ 少し木蔭で休んで行きなさい 軽い熱中症だったらしい その彼がお礼にきて それから 時々顔をみせるようになって

二十四歳！ 若いわねえ 可愛い顔して彼女いるんでしょう 仕事が面白くなって会社辞めました それが原因で彼女とも別れました

私も一人 子供もいなかったし共働きだったので ご近所づきあいもしてないの 主人と信州旅行を計画していたね 旅行会社にキャンセルしてないのよ なんて話をするように

行きましようか？ 僕でよければ キャンセル代もつたいないでしょう 寂しいふたりづれ それでも幾らか 気分転換になりました

金さえあれば 信州あたりで人生やり直してみたいなあ お金なら貸してあげるわよ やってみれば 生命保険金なんか要らないもの 誰かの役に立つことがしたくなっていました

仕事見つかりました 風の便りが届きました

## 今年の秋

信定 和美

裸の二歳児が部屋を  
走り回る  
リビングからキッチン  
カーテンに隠れ  
いないいないばあっ！  
おなかばんばん  
膨らんだおなかをたたく  
ピピ ピピと笑って  
チンチンをさわる  
気になるよね  
ぶらぶらして

種をのこすものだもの

地球は終わりました  
という人がいて  
いやまだまだこれから  
という人もいる  
世界のひたすらな営みは続く

種をのこすために

この鬱屈した二〇二〇年  
カラスがごみをあさって飛びたつ  
猫の道路に気持ちよさそうに横たわり  
車がそばまで来てやおら動きだす  
皇帝ダリアはゆうせいを誇示するように  
青い空にピンク色に浮かぶ

## みすてないで

するすると白蛇のエレガントさで内腑  
を 通過していった

しなやかにたおやかに光彩の風に  
遊ぶシフォンのスカーフ

白雲をとらえ  
碧空に 舞い舞う

瞬時！ 白炎をはなつことも あるのです

どうぞ みすてないで

# 大神

野元正

満月の夜  
森林を出て 草原をゆく  
尽きると そこは断崖  
眼下に 町の灯りが 瞬き 煌めき  
人が まだ眠らない  
蠢き 轟めいている

そのずっと向こうは  
月光が渡る海  
遠くに群青にけむる島  
かつて 海辺までが  
われらの縄張りだった  
あの島から 海を泳いでやってきた  
おまえの父さんは  
猪一族を 守るため 闘い  
大神に 肅正された  
大神の遠吠えが

だが……どうすることも  
出来ない  
大神は  
鎌や鉛玉や巧妙な罾や毒餌に  
斃れた。  
殲滅はしつこく繰り返され  
ついに 大神は絶えた

われらは 密かに  
幻の大神の存在を 信じ  
人は あらゆる書物で  
狼の絶滅を 誇る  
われらの子孫は  
大神がいなくなつた分  
繁栄した  
それもつかの間  
人はわれらの縄張りを  
侵し始める  
瞬く間に食い散らかした

今も 耳に残る  
人は彼らを狼と 呼び  
われらはと呼んだ  
大神は海辺まで出張つてきて  
われらを問引いた  
しかし  
根絶やしには しなかった  
子孫へを 継ぐことを  
許した

人は  
大神を 根絶やしにし  
野生の殲滅を 楽しんだ  
人以外の  
生命を食し 生命を 継ぐものは  
その悪魔の所業を蔑んだ

大樹を伐採 森林を狭める  
われらを森林の奥に  
追いやり  
自然に刃を向ける  
天変地異  
異変は絶え間なく続き  
われらの食べ物は尽きる

やがてわれらは  
野生でいられなくなった  
里におり  
食べ物を漁る  
人の怒りをつかた  
今、殲滅を恐れて  
息を潜める  
人に神神の鉄槌が下されんことを  
祈る  
それは  
夢幻ではなく この疫病の猛威だろうか

## 手のひらの地図

橋本 千秋

ひとつ通りを間違えたのか、目印のコンビニがない。引き返そうかと思いい周りを見るとバス停に人がいる。メモの住所を尋ねると、手のひらのスマホを指先でスーッとなぞる。この道でも行けますが、かなり遠回りになりますね。差し出したスマホを覗きこむ。

人影のまばらな商店街、母は植木鉢の並んだ路地を入っていく。一軒の家の前に来るとガラス戸を開けて入っていた。土間に机と椅子が置いてある。奥から女の人が出てくる。母の話聞いていたが、手を取ると明かりの下で手のひらを覗きこみ、指先でなぞり始めた。母が頷いたり、首を傾げたりしている。女の人が時々私を見て話し掛ける。路地を通

る人影がガラス戸に映り、子どもの声が走り抜けていく。

街に地図を見る人がいたあの頃。駅の路線図を見上げていた母は、どこへ行きたかったのだろうか、手のひらを見る。

## ミヤちゃん

八田 光代

ミヤちゃんは中学一年の男の子  
両親と兄の四人家族  
ずっと気になっていることがあります  
あるとき

思い切って

仲良しの同級生の女の子  
アイちゃんに尋ねました

あのね 女の子って

トイレにいかないって

ホント？

アイちゃんは

ケラケラ笑い出して

ミヤちゃん そんなこと

知らなかったの

決まってるじゃない

あたりまえよ

そうか

やっぱり

お母さんの言ってたことは

本当だったんだ

ミヤちゃんは

心の中で

納得しました

四十数年前

中学生の娘から

聞いた話です

## 旅をする

浜田 多代子

黒くうづくまった山  
紫色の空の向こうから  
いつもの太陽が顔を出す  
静かに手を合わせて祈る  
誰に会うことも否と言われ  
行動の自由を奪われても  
早朝からただ一人  
黒いリュックを背負い  
旅に出ようとしている

昨日見た夢を  
鮮明に思い出す  
星の光が天空をてらす  
空に向かって手を伸ばす  
星の光は天空の画板に  
流れる渦の輪を次々と作る

ぐるぐると流れる渦は天空を埋めつくす  
苦しい  
頭が中心が疼く  
疲れた頭に突き刺さるような言葉  
あなた 旅には行けませんよ  
ずっととどまっていなければなりません  
地球は危険信号を放出しています  
この地球は病んでいますから  
世界を流れてきた風が叫んでいる  
でも旅に出たいのです

この国にも  
海を渡った国にも  
氷の国にも  
熱帯の国にも  
旅する人は景色と人に会いたいです  
単純に話し笑いあいたいです  
笑える人たちの中を旅したいだけです

◇はじまりの場所へ

平岡 けいこ

立ち止まってゆつくりと首を回す  
ここはどこだろう  
どこへ行くのだろう

目的地に辿りつくはさまざまある  
人は最短で目的地に到着することを美德とするが  
長い人生において最短でたどり着くべき場所などない  
生き急げば死に近づくだけだ

常に道を失う 不安な気持ちを抱えて  
間違いかもしれない道を  
正しいと信じて歩く  
時折 立ち止まって友に確認したり  
家族に励まされながら

しばしば他者に失笑されるだろう  
後から来た人に追い越されるだろう  
間違った道だったと失望するかもしれない  
共に歩く人を失い孤独にまれるかもしれない

それでも歩こう 友よ  
暗い道は声を掛け合って  
辿り着いた先の目的地を見据えて  
随分無駄に歩いたねと笑われても

しっかりと首を上げて 堂々と  
例え気の遠くなるような回り道でも 私は歩く  
歩き続けることに意味があるのだ

## 未来の記憶

福田 さとる

十月には

人々がマスクに心乱れて 消毒用アルコールを求めた日々が  
ほんの少しだけ遠ざかったように見えた  
しかし 実態はほんの数か月前より悪くなっている  
私たちがこの悪い状況に慣れただけ  
本当の絶望状態を把握できないのが人であると知った日々

五十年前に「成長の限界」が発表されても  
その限界はだれにも記憶できず 理解もされず  
やっぱり人間は未来の限界へとまっさかさまに落ちていった

私たち人間はもっと賢いと信じていた日々  
愚かな中にも賢い人は必ずいると信じていていた日々  
そのような過去は薄暗い未来に遮断され消えてしまった

五十年前 未来をどうするかは私たちの手中にあったのだ  
ほっとするはずの未来はマスクの日々になった  
身近な店で消毒用アルコールを捜しながら  
人類の楽観的な予測はまさに楽観に過ぎなかったことに気付く  
世界は予測以上のスピードで壊れつつある  
ノストラダムスよりも確実な未来がやって来るだろう  
その姿を見ようとせずに 希望につながる未来の記憶を捨て去った私たち

だが きっと同じままではいない私たち  
滅亡が確定したとたんに たった一つの小さな希望であっても  
まだ私たちには子どもたちがいるから 絶望せずに生きて行く

ここに小さな花がある ここに小さな虫がいる  
私たちはこの花を 虫を助けて  
子どもたちと生きようではないか それが優先順位

この小さな者たちのために生きよう  
そこから私たちの世界を守って行こう  
絶望から今出発だ



## 須磨にて影を汲む

福田 知子

あらずかしや

見慣れない夢の

荒れた毛髪を梳くきみの胸に宿る波の飛沫

いかにふりはらおうとも

汐汲む桶に映るの月影

行平の残した狩衣と立烏帽子を身に纏い舞う松風のように  
きみにはにむすぶ露のごときもない

果てしない夢の続きを追いかけても

あの声が途切れ途切れに追いかけてくることはあっても

ときに嵐となり闇のを強く撃つ須磨の浦の波ばかり……

そうだ 松のに沿ってしばし歩いてみようか もういちど

出逢えるかもしれないぬ一夜の僧の語り

祈りのような昔語りにや緑のとなつて身を埋めつくしたい

たちわかれ

いなばのやまの みねにおふる

まつとしきかば いまかえりこむ（中納言行平）

大正時代の色硝子に透かす海からの光と風

太陽が昇り 朝陽さす松に亡き愛猫のほり 耳を澄ますと

波音に混じって地の底からわずかに幽かに あの声が

あの声が聴こえてくる

ひっそりと月影を汲む松風に似て

今朝見れば

数多の影も恋衣も恋猫も失せて……

松風ばかりがのこっているよ

松風ばかりがのこっているよ

## 森の奥へと

福永 祥子

一步踏み出せば

あとはどうにかなるよ

軽くハミングしながら

四人と二匹は前へと進む

「このワンちゃんは おとなしいから」と

大川さんは尻尾の短いワンちゃんの頭を撫でる

ご機嫌な時は人間と一緒にだね 佐田さんが言う

ううん 人が犬に似てくるのよ

大川さんは即座に反論する

犬も猫も飼ったことのない岩田さんは

遠くを見ている

ほら あんなどころに人影が

まさか 誰かの知り合い？

おしゃべりに夢中な私たちは

行き先も分からない

とにかく前へ進みましょう

ひよっとして

誰も帰れなかったりして

大丈夫 ワンちゃん二匹だもの

相変わらずノーテンキな大川さん

あなた まだ詩なんか書いてるの

岩田さんが唐突に私の方を振り向いた

― 迷い 迷いながらの創作だから

いつも シ が道ずれかも―

ねえ 出口はどっち？

私たちは不意に立ち止まる

どこに向かって

歩き続けているのだろう

森を抜け出た四人と二匹は

さらに

深い森へと迷い込む

## アイデンティティ

藤井 清

灯りのない部屋で  
自分の息遣いを聞いている  
息をひそめて聞いている  
私の影が私を見上げて

本当の自分 という  
他人行儀な思い付きが  
はじまる 私と影の鬼ごっこ

私が逃げる。私が追いかける  
私も逃げる。私と追いかける

どうどうめぐりの鬼ごっこ

迷い込んだ森の中を

いくら探しても私はゐなかった  
誰もゐなかった  
誰もゐない白々しさ

ケイタイが鳴っている  
架けて来た奴は判っている  
彼奴だ  
だから出ない 出てやらない

受話器の向こうで 私が喋っている  
(私は私でした)

季節が変わった  
のに、灯りのない部屋に  
私を探しあぐねた 私がある  
しかめっ面で  
今日も、ひとり

## 地味な事件簿

牧田 榮子

風の気ままが消えた  
葉月 雲もないひるさがり  
太陽はおじけなく熱射する  
集合住宅のビルが茹だる  
角っこに住むワンちゃんのかえもしない  
高校生たちは夏休み（最上階は女子寮）  
「火事です 火事です」  
自動警報装置の連続音が通路奥から  
その若夫婦は早朝そろって出勤していた  
非番の管理員室も鳴っている

こうしてはいられない  
携帯電話と財布と（空っぽだった）  
鍵と（マスクは忘れ）  
体温より熱い危険な戸外へ  
どの窓もけむりなし ひめいなし

とびだしてくる人なし  
鳩がならんで非常階段 涼んでいる  
「火事です 火事です」

警備会社の車が到着（留守宅は開かない）  
どこかに電話をかけている  
鳴りやまない管理員室  
何度もなんどもいつたりきたり  
「火事です 火事です」は誤作動です  
電話からまだ解放されない

日は暮れ  
優しい家族たち  
小鼻で嗤われて  
冷やしあぐねるビルをつれ  
海に浸かろうと  
こっそり  
夜の青信号をわたっていく

## 笹舟

増田 まさみ

戯びの終りは  
笹舟を

小川に浮かべる

負け犬の

懺悔のように

膝を折って

小暗い石橋の

向うへと

飢餓を埋葬する。

迂いぶすな

忘れ形見のように

謐かな帆影が灯る

## 手紙

鳥揚羽が

ランタナの花を

ふた廻りして

消えた

お國のために

からだを張って

おとしまえをつけぬまま

畑の茄子のお守です

いまは。

憤怒を

折り畳み

黯い手紙は

白昼の死角へと

消える

## 神の使者

松下 玲子

我家から小高い山の麓に向かつて二、三百メートル ゆるやかな坂を上りきったところに こじんまり小さな夢野 氷室神社があります。

大國主大神や仁徳天皇を御祭神としており 大正五年三月碑名の石碑が立っている。その鎮守の森には他にも天照大神 春日大社など由緒あるう神々が朽ち欠けた祠や古びた社 石塔等に祭られ 雑然と点在している。うっそうとした繁みの場所は肅々と靈気漂い 鳥の声だけの静寂 そびえ立つ樹々は何故か 原生林を思わせ 棕櫚の葉しんろっぱなども垂れ下がったりしている。暗がりの中 時々の木漏れ日に天を見上げる 重なり合う葉っぱ その透き間からの青い空 日常の次元が近づく。更に湿っぽく暗い奥へ進むと 氷室の古跡があり 千六百年程前の話が今でも息づいている。しかし最近はこの神社も平安時代に平清盛が広島厳島神社より奉斎された 市杵島比売命（れんあいべんてん）にお参りする人が増え 愛の手紙を書く若い女性や カップルが訪れ 華やいでいる。

本殿 左手奥まったところに 氷室稻荷神社があります。

朱色の程良い大きさの鳥居と同じく程良い大きさの神の使者 きつねが同じ朱色の前だれをして脇に二匹づつ鎮座している。石は古くずっしり苔むしている 耳が欠けたり 尾が繋がれたりしているけれど まるで生きているかのように ころころと可愛い。正面を向いて大きな口に笑みを浮かべているきつね 左向きに宝珠をくわえむつかしい顔をしているきつね 右向きに經典らしき巻物をくわえ ふむふむとじっと何かを考えてくれているきつね 最後のきつねは又 正面を向いて何故か あっけらかんと  
「大丈夫さ こうして百年以上も此処に居るんだよ」と

心配事はあるけれど いつしか毎日のように此処に来るようになり 一日の始まりとなっている

## 逢瀬

丸田 礼子

草に蔽われた開墾地  
取り残され 歳月に揉まれて  
ひとり老いたおばあさん

足取りゆっくりゆっくり  
顔をあげたまま  
見つめる先に

桜咲く

来ましたよ

その肩へ ふうわり

はじまりの落花

原野のまんなか

身ひとつで こんなにも  
向き合う姿  
に呼びかけることはできない  
とても

静かに しずかに

風にさらわれぬよう  
手を伸ばし しっかりと留める  
一枚の絵

## 予定は

水こし 町子

すこしゼンマイが緩んでいる  
鳩時計は十六年たっても  
振り子は動いている  
それが  
夜中にならず止まり  
朝になると  
正しい時刻になっている  
誰が時計を止めたのか  
何も考えないで  
予定表を書く  
本当はとんでもないことだと  
昨日 気がついた  
中止になったり  
無期延期になったり  
いつでも  
突然おこるのだ

生きて今  
ここにいないこと  
ここにいないことは  
そんなに難しいことではなく  
その時  
たまたま  
一瞬の運が良かったということ  
階段から落ちる  
海に溺れる  
車にはねられる  
今までの出来事を  
一つ一つ思い出すことが出来る  
冬を越した球根が予定通りに  
葉の間から 蕾が育っている  
夜中に振り子が止まっている間だけ  
窓を開けると見えないはずの  
小さな星たちまでも見える



## 本当は

宮浦 久子

本当は

声をあげて泣きたい

生きていたくない

湯あがり

鏡に後ろ姿 映してみる

見たこともなかったから変化の程は不明だが

美しくない

何があってもおかしくないと骨身にしみる

こんな夜は

無性にカフカに会いたくなる

居場所は覚えている

本棚の二段目 左端

真っ黒い背表紙にくっきり浮かぶ白抜き文字

『絶望名人カフカの人生論』

―誰よりも落ち込み、誰よりも弱音をはき、誰よりも前に進もうと

しななかった人間の言葉―の帯文

「父が・・」「仕事か・・」「胃が・・」「睡眠が・・」等 愚痴ばかり

関心があるのは自分のことだけ

おそろしくネガティブな言葉に救われる

レコードをかける

フォーレの「夢のあとに」

膝を抱いて泳がせる

サラサートの「ツゴイネルワイゼン」

目を瞑り ひたすら耳を傾けていたら

すこし眠くなってきた

もう少し生きてみたい

あ、そんなことあったかも

なんて

あっけらかんと言える日が来るかどうか

確かめてみたいのだ

## 一日中撮られっぱなし

三宅 武

余輩は撮られておる  
写されておる  
映されておる

JR「快速」停車駅  
切符自販機 改札口  
プラットホーム

鉄筋コンクリート  
十四階建「立体長屋」  
一歩出た正面のATM  
Automatic Teller Machine  
全自動 窓口業務 機械  
行列を横切り  
階段を八つあがる  
銀行の支店を左に見て  
まっすぐ北へ また階段  
スーパールの二階に続く  
まっすぐ進めば

ここまでの距離で  
余輩はすでに  
幾台のカメラに記録されたのか  
チラ見だけでも三台  
目立ったカメラはないが  
駅で捉えられたた画像で  
逮捕の例が報道される  
さて余輩は  
自宅を出てもどるまで  
計何分間

撮られておるのか  
郵便局に続く道にも  
それらしきモノが  
あるではないか

集合住宅二階まで  
エレベーターに乗る  
監視カメラのモニターに映る  
余輩 斜め後ろからの動画  
自分の歩行が 一瞬停止する  
再び動く しかも ゆっくり  
実物より 少し遅れ気味で 消える  
余輩が映っておる気がせぬ

## 酔人の夢

室井 正彰

―生物により高等とか、より下等とかいう  
言い方は間違いである　ダーウィン

嵐の後の谷間の林は虚空のように静かだった  
老人には梢の間から漏れる朝日が眩しい  
目を懲らすと十字架が浮かび　人の姿が光り輝い  
ていて　血を流したキリストに見えた  
初めに言葉あり　汝の隣人を己れの如く愛せよ  
一粒の麦死なずばただ一粒にてあり　死なば多く  
の実を結ぶべし  
クリスチャンの清楚な恋人や敬虔な友人たちが  
木々の間を楽しそうに語りながら歩いている  
彼らは最後の審判で天国に召されるであろう  
だが　異教徒たる酔っ払いの老人は別であった

谷が二つに別れ　黒い屋根の寺が見え　背の低い  
住職がにこやかに手招きしている　奇特な農夫が  
新作の釈迦涅槃図を寄贈したから見て行けという

から一条の光が叫ぶ　宇宙だって虚空なのだ  
星も人も獅子も自分の意志で生まれた物は手をあ  
げなさい　皆無なのだ　そこで万物は私の存在理  
由を求めて輪廻転生　戦を繰り返すのだよ  
だから　我を馴化して　仲良く平和を生きよう  
悉皆成仏だと北枕の涅槃の釈迦

：老人は寺を辞し谷間の旅を続ける　梢から漏れ  
る光が人になり　奇妙盡十方無碍光如来　南無不  
可思議光如来とあの背の低い住職の読経が迫る  
二十世紀　アインシュタインは光速の二乗の係数  
を掛けた原爆のエネルギーで呪いの闇に転生  
貧しい人達が頭髮を結直した革命の夢　引き倒さ  
れるために建てたか　光を失った独裁者の銅像

老人は更に前に見える光を追う　酔いが進んだよ  
うで　二つに分かれていた谷が消える  
緑草の広野に聞こえる牛や豚や鳥たちの合奏  
沙羅の下で汗拭き拭き働く若い兄弟姉妹の叫喚

釈迦の沢山の弟子たちの泣声が増えている画面  
草木が風になって啼き　象も獅子も牛や豚たちも  
大きく口を開けて天を仰いで哭いている

北枕の釈迦が静かに涅槃に入るところである  
この後はどうなりますか　正法五百年　像法五百  
年　末法の末の今の世だが　南無阿彌陀仏を唱え  
れば極楽浄土に救われると住職はいう　浄土では  
人も獅子も牛や豚や草木も悉皆成仏である

老人は酔ってるようで　涅槃図の牛や豚が嘯く  
始皇帝も清盛も五十年を生き永遠を夢見たが　諸  
行無常　王者必滅　永遠や無限は人間の戯言　さ  
もないとわたしたちは永遠に人間の畜である　す  
ると画中の太陽が黒点を増し　狂ったように燃え  
騒がしい害毒垂らしの生物め　今に地球ごと灼熱  
地獄の灰燼に帰してやると気炎を上げる  
自惚れるな太陽　おまえも限られた時間に燃え尽  
きると宇宙の向こうのブラックホールが訝する  
宇宙よ　おまえだっていつか潰れるぞ　更に遠く

美しい蓮華咲く池では　談笑するひどく老いた釈  
迦や空海　そしてガンジーや毛沢東たち  
：ゆっくりと流れる輪廻の交響楽

やがて　日が沈み　老人は街に出た  
そこはかとなく魚を焼く匂いが漂ってきて  
親鸞のいうように　来世では鴨川の魚たちの餌に  
ならなければならない  
この世で不幸なものたちが　来世では幸せなもの  
たちにならないと一切の理が合わない  
平等施一切　同発菩提心　往生安楽国  
老人は空高く声上げて経文を唱えようとしたとた  
んに枕から頭が落ち　酔人の夢は醒めた

「あなた　あなた　好いお天気ですよ…」  
老妻の明るい声が光に成って射し込んで来た

## 尹東柱の碑

バッハ 無伴奏チェロ組曲第二番ニ短調 〈サラバンド〉にのせて

望月 逸子

京都の チャペルがある大学の一角  
尹東柱の詩碑は立っていた  
表にはハンゲルで  
裏には 日本語で  
詩集『空と風と星と詩』の「序詩」が  
刻まれている

八月の昼下がり  
傍らに立つ櫟の若木に風が吹き  
細い梢を揺らす

日本に留学していた  
朝鮮の若い詩人が  
ハンゲルで詩を書き

民族の誇りの灯を点し続けたという「罪状」で  
福岡刑務所で獄死したのは  
日本が太平洋戦争に敗れる日の  
僅か 半年前！  
尹東柱の碑の前を  
テニスのラケットを持った女子学生らが  
談笑しながら通り過ぎ  
虫捕り網を持った少年が  
虫かごを首に下げた弟の手を引き  
木立の中に入って行く

蝉の声が 絶え間なく透る  
尹東柱の碑の傍  
時が 緩やかに暮れていく

## 米を研ぐ

森田 美千代

焼けた暑さのかさぶた剥かれ  
スズムシやエンマコオロギ  
わが世とばかり鳴き始める  
静かな秋の夜に物思いに耽っていた あの時  
教科書を開いたまま頬杖ついて耳を澄ます  
大地を震わす打楽器  
幼い音色の横笛  
全身で

いのちの痛さ孕み天空にひらく

届いた秋の果物の箱の中

今シーズンには長雨の影響で黒系の葡萄に病気が  
発生し 数粒抜けた商品があります。ご迷惑を  
お掛けしております。味は例年通りです。なお  
長らくのご愛顧ありがとうございます。今シ  
ーズンを持ちまして当園は閉園となる運びとな

りました。今後は時代の流れにのり醸造用葡萄  
畑として栽培は続けていきます。新しいワイナ  
リー作りに挑戦していく覚悟です。  
雲の割れ目の色彩 重くのしかる  
闇を種子にして  
しなやかに  
つらぬく意志を垣間見せ  
強い秋の陽をあびて

今夜も耳元で鳴くスズムシやエンマコオロギの協奏曲  
草叢の舞台 シンフォニー奏でている  
幼き日 ぶどう棚から  
ほいっ  
なつかしい匂いみちている  
未来のことばをもたない黒い葡萄の重さ  
ひとまわりして蘇える  
月や星を光源にして  
米を研ぐ

藍那 あいな

四つん這い  
頭をあげて。  
腕を伸ばせば  
目の先に。

花一面  
紅い帯。  
よく見れば  
白まじり。

余白のよう  
隙き間のよう。  
落丁のよう  
聞き取れぬ眩きのよう。

若桜 わかさ

とたんに  
山に入る。

川幅 みるみる  
狭く。  
山肌 ますます  
色濃く。

川渡り  
坂を越え。  
どこから  
どこへ。  
とたんに  
山が出る。

上遠野 あたの

耳をすませば  
わずかに。  
絶えようとして  
やはり わずかに。

それでも  
そつと。  
あたりをはばかりように  
そおつと。

おもい起せば  
あの頃。  
おもい返せば  
あの頃。

そうとも  
あの日。  
そうとも  
あの時。

## 折り合い

山口 洋子

足ふるえる  
まちがいでなく  
肩をかすり  
背中をすべり落ち だが  
その姿はすばやくて  
ごっそり心根攫み去り  
もう見えない  
冷た  
冷た  
重た  
重た  
かっただのか  
かっただのか  
そんなことはあとからの感傷  
ヤモリがどこかでわたしの心根をもてあそぶ  
守宮家守壁虎  
恐ろしい見目形

家を守ってくれるのなら  
ヤモリはいい子？か  
許そうか  
この辺り  
ハチ飛ぶし  
イノシシ出るし  
歩めばクモの巣ひっかぶり  
みんな共存  
それにしても新入り  
世の中マスク顔あふれ  
目は口ほどにモノを言えず  
息苦しい  
完璧もそこそこで  
と そうは思いつつ  
畏れている

## 黙禱の先へ

山下 輝代

その人は真っ直ぐに語ります。

押し寄せる

苦しみかなしみに向き合い

いくたびも

噛みしめ

問いかけ

行ったり

戻ったり

悔やんだり

その深いところから

為すべきことを求めゆく人です。

小さな人に

隣の人に

語りかけ

語り合い

海鳴りを聴き

蕾に立ち止まり

稲穂に歎び

渡り鳥を見送って

この世の

あらゆる恵みに黙禱する人です。

静かに

静かな

力強い、丈夫な拳を持っています。



## 母子手帳

山下 晴久

さて 何から話しましょうかと  
いうより すべて  
ご存じだったのでしょうか  
もしかして 人ではない  
何ものかになり  
いまも私を抱きしめて  
いるのでしょうか  
しばらくして雪が降り  
港に大きな船が入ると  
あっという間にそれは広がり  
多くの人命を奪っていきました  
さながらこれは  
何かの試練でしょうか  
アンシャンレージュのあとに  
哀れな羊たちがいて

うるわしき革命の申し子は  
慈愛に満ちた言葉で  
友人のことばかりを  
気にかけているらしい  
いいえ、それでも  
どこかの家の軒の下に  
燕が巣を作りました  
ひどい暑さと感染者と  
明日の天気を  
運命（さだめ）のように想い  
それから  
風鈴の音を聞きながら  
もう一度  
いっしょにスイカが

食べたいですね  
お盆が近いから  
庭の草もひきました  
世界の何が変わり  
私の何が変わるのか  
（なんにも片づけていないけれど）  
母さん  
あれからのこと  
何を話しましょうか

## 風にかづける（心象スケッチ）

（俺は孤独の対価を払い、少なくとも  
借りは返したーポブ・デイラン）

山中 ゆきよし

ことばが  
失せてしまった  
その罪を 僕は  
風にかづけた

触れもしない  
錆色の花卉が散る  
僕は凋落を抱き  
瘴気を纏った

瀰漫する 愛の形しろ  
とほい日の 失意と逆意  
ひきちぎられた哀切  
うつろひやすい風景は

もつと生きろ と云ふ  
とき放て とも云ふ

## 明日のことはあすの風に

山本 眞弓

もつとしゃんと立ちなさい  
腰を張り 両足そろえて  
大地に直角に立ちなさい  
立たないうちに腰は碎け膝が抜ける  
よれよれへしゃげる  
もつと大地に足を踏んぱり・・・  
(この娘はしゃんと立っている)

もつとしゃんと話しなさい  
一語一語くつきりはつきり  
一直線に話しなさい  
話す前から呂律が斜めに脱線  
へろへろすべる  
もつと口元引き締めて・・・  
(君はいつも正しい)

どんどんこんがらがって  
足は鈍く  
口は濁る  
右も左も分らない  
口から泡のようにことばはこぼれ  
(今日はしゃべりすぎました)  
筋肉はしおれた野菜のようにぶよぶよ  
(昨日はもうおわりました)

ひび割れたざくろの脳みそ  
飛沫が感染すること知ってました?  
昼顔と猫じゃらしがじゃれあうの知ってました?  
コロナだろうが  
マスクだろうが  
木漏れ日にまどろむ  
(明日のことはだれも知らない)

## 渇き

山本 彰子

一九九九年 日本

股関節の手術後

口の渇きで目がさめた

吸い口の先に唇がふれるや

私の喉は勢いよく水をすった

二〇〇〇年 アフガニスタン

四〇〇〇m級の山々に雪がつもらず

ドラエヌール渓谷の小川が涸れた

泥水をすする子ども

下痢が止まらない

子どもを抱いて炎天下を歩く母親

ようよう診療所についたが

子どもは母親の腕の中で息たえた

水 水がほしい

医者は白衣を脱いでシャベルにぎる

掘った井戸が一五〇〇本

二〇〇一年 日本

彼の息子が重い病気にかかった

米国が同時多発テロの報復空爆を開始

地上には大旱魃で苦しむ村人がいた

飢える子どもらに食糧をとどけねば

迷い苦しむ彼に息子は

「お父さん、人は、いつぺんは死ぬから」  
享年十歳

「おまえの弔いはわしが命がけでやる」

二〇一三年 アフガニスタン

シヨベルカーをのりこなし

暴れ川に堰をつくり

水路の土手にヤナギをさして

用水にとうとうと水がながれた

二〇一九年 アフガニスタン

銃弾をあびた彼が残したことば

「大丈夫」

二〇二〇年 日本

ひねればながれる水

私の喉は渇きをわすれている

この心のひりつきはなんだろう

## 蜻蛉

横山 美代子

確かにあつたはず

なのに 何もなかったように過ぎさり 消えてしまう日々も

布の中に織りこまれ 思いだせばよみがえってくる

まっすぐ伸びた時間 織られていく日々

記憶が心の糸で染まっっていく

蜻蛉が布の中に

机の上に昆虫図鑑 大部すり切れて

蜻蛉の頁が開かれている

「今日 塩辛蜻蛉見た 体が灰色がかった青で 塩をふいているようだった すぐく速く飛んで 捕まえられなかった」

日焼けした顔 目は好気心にあふれてよく動く

「この蜻蛉だよ あんな薄い翅でどこまでも自由に飛べるなんて すごいな」

図鑑を指さしている

夏休み 毎日外に出では発見

この子は 夏をすべて吸収している

蜻蛉は 遠い記憶から飛びたった

どこまでも どこまでも

翅が光をはね返す

疲れると 鶏頭の支柱 竹の先に止まって翅を休めた

どうしてここにいるのか 不思議そうに首をかしげて

織られていた夏の思い出

短い糸がつなぎ合わされた日も

今日という新しい日を

明日というもっと新しい日を

過去の空白を現在で埋めていきながら

限りなく染められていく布の記憶

まっすぐ伸びた時間に織りこめられて

# 耳

吉田 定一

いい耳をしているね

耳は小さな入江の港だ  
ことばたちがここにやってきて  
一般の舟となって停泊する

いい耳をしているね

聴くこと到这里躍らせて決して話すことはない  
おしゃべりたちがやってくると  
入江の港が暗くなる

いい耳をしているね

あなたはわたしを誘う水先案内人

入江に点滅する灯あかりのように  
大きな書物を抱きしめている

ああ、いい耳をしているね

深い闇が訪れて月が錨を下ろす  
入江の港は沈黙に包まれ  
からだのすべてが大きな耳となって横たわる

# 引継がれる生命<sup>いのち</sup>

凜 清太

沢山の誰かが  
沢山の誰かのために  
育んだたくさんの生命  
今日も私はたくさんの生命をもらった  
そして  
私は今日も生き延びた

私の生命は  
明日に何が提案できただろう  
赤子は母親の胸に抱かれたか  
胸いっぱい明日を吸い込んだか  
少年は天空を仰ぎ見たか  
その眼は明日に輝く己の星を捉えたか

少女は仄かな思いを手紙に託せたか  
祈りは天使に通じ願いは明日へ渡ったか  
青年は不可思議な一点を貫けたか  
凝縮した念は確信の明日を引寄せたか

乙女は迷い彷徨い奈落に落ちたか  
明日の空に祝福の鐘は鳴り響いたか  
老人は首を垂れ何を待ち望んだか  
神の裁断は明日への希望に満ち足りていたか  
生命は今日も  
生命以外の何物も拒絶して  
明日に引継がれるのか

## きつと……神様になれる

きつと あなたも神様になれる……

……きつと きつと あなたも  
誰かの神様になれる

誰かの笑顔から  
誰かの言葉から  
誰かの行為から

あなたは  
元気をもらったことがありますか  
熱い思いで満ち溢れたことはありませんか  
その時 その誰かが  
誰よりも近い人に思えたことはありませんか

きつと あなたの笑顔で  
きつと あなたの一言で

## 測れない距離

渡辺 信雄

心は見えないから  
突然に無言になり  
どこを視つめているか  
わからない時がある  
泣き出すか  
怒りはじめると  
心の在処を必死で捜す  
人と人の距離は測れるが  
心の痛みを  
推し測れない  
同じように痛むことはできない  
心の痛みは薬はないから  
言葉が通じない時  
どうしたらいいだろうか

自分の世界に閉じ籠る人を  
こちらの世界に  
連れてくるができない  
魔法の言葉もない

あなたの故郷の柿を一つ  
もいでくる  
少女の時  
スカートを翻し  
柿の木に登ったという

今は食べられないのなら  
あまい熟柿になるまで  
待って  
食べればよい



会員の発行物（詩集・詩画集、主宰詩誌ほか）

〈2018年11月～2019年5月〉

- 北岡武司詩集『時のなかに』（春風社）  
安水稔和詩集『地名抄』（編集工房ノア）  
江口節詩集『篝火の森へ』生田新能詩篇  
（編集工房ノア）  
黒田ナオ詩集『昼の夢夜の国』（濔標）  
尾崎美紀絵本『のどほとけさん』  
（ひさかたチャイルド）  
高木敏克小説集『港の構造』（航跡社）  
中島友子詩集『おくりもの』（編集工房ノア）  
佐藤勝太詩集『夢がたり昔がたり』（竹林館）

〈2018年6月～2019年10月〉

- 安水稔和詩集『辿る？』（編集工房ノア）  
季村敏夫『一九三〇年代モダンリズム詩集』  
（みずのわ出版）  
中嶋康雄詩集『プランクトンしかない家にも』  
（図書出版まろうど社）  
中嶋康雄詩集『うそっぱちかもしれないが』  
（濔標）  
坂本久刀詩集『時鳥啼く』（濔標）

〈2020年11月～2020年5月〉

- 竹内健二郎詩集『四角いまま』  
（ミッドナイトプレス）  
今村欣史随想集『コーヒーカップの耳』  
（朝日新聞出版）  
安水稔和詩集『続続地名抄』（編集工房ノア）  
内田正美詩集『野の棺』（濔標）  
たかとう匡子詩集『耳風ぎ 目風ぎ』（思潮社）  
神田さよ詩集『海のほつれ』（思潮社）  
野口幸雄詩集『おもちゃの馬』（濔標）

- 玉川侑香CD『朗読詩集 かなしみの祭り』  
辻岡真紀子詩集『吹き抜けた時』（濔標）  
牧田榮子評論集『倉橋健一の詩を繙く』

私の読書ノートから』（濔標）

『全国川柳作家年鑑』第55回

（ふあうすと川柳社）

〈2020年6月～2019年10月〉

- 季村敏夫編『カツベン 詩村映二詩文』  
（みずのわ出版）  
増田まさみ句集『止まり木』（霧工房）

会員主宰誌

〈2018年11月～2019年5月〉

- 「鶴鶴」11号／江口節
- 「鳥」75号／なす・こういち
- 「個人誌 鳶が城便り」／足立勝歳
- 「アリゼ」189号、190号／以倉紘平
- 「ガーネット」87号／高階紀一
- 「個人誌 河口から」5号／季村敏夫
- 「現代詩神戸」264号／三宅武
- 「個人誌 EDGING」42号／寺田操
- 「別嬢」108号／高橋夏男
- 「ア・テンポ」55号／玉井洋子
- 「時刻表」5号／たかとう匡子
- 「RIVIERE」164号／永井ますみ
- 「多島海」35号／江口節

「Messier」53号／香山雅代  
「月刊めらんじゅ」139号、140号、141号、142号、143号  
／大橋愛由等

〈2018年6月～2019年10月〉

- 「おたくさ」Ⅲ-3／鈴木漢
- 「RIVIERE」165号、166号／永井ますみ
- 「現代詩神戸」265号、266号／三宅武
- 「鳥」76号／なす・こういち
- 「個人誌 鳶が城便り」／足立勝歳
- 「EDGING」43号、44号／寺田操
- 「月刊めらんじゅ」144号、145号、146号、147号  
／大橋愛由等
- 「時刻表」6号／たかとう匡子
- 「鶴鶴」12号／江口節
- 「多島海」36号／江口節

- 「プラタナス」65号／玉川侑香
- 「別嬢」109号／高橋夏男

〈2019年12月～2020年5月〉

- 「RIVIERE」167号、168号／永井ますみ
- 「月刊めらんじゅ」148号、149号、150号、151号、152号  
／大橋愛由等
- 「別嬢」110号、111号／高橋夏男
- 「現代詩神戸」267号、268号／三宅武
- 「EDGING」45号／寺田操
- 「Messier」54号、55号／香山雅代
- 「時刻表」7号／たかとう匡子
- 「ア・テンポ」56号、57号／玉井洋子
- 「多島海」37号／江口節
- 「遙」1号／和比古

- 「あむの木通信」131号、132号、133号、134号、135号  
／福永祥子

〈2020年6月～2019年10月〉

- 「表情」西宮文芸誌 29号／西宮文芸協会
- 「RIVIERE」171号、172号／永井ますみ
- 「現代詩神戸」269号、270号／三宅武
- 「月刊めらんじゅ」153号、154号、155号、156号  
／大橋愛由等
- 「別嬢」112号／高橋夏男
- 「鶴鶴」13号／江口節
- 「あむの木通信」136号、137号、138号／福永祥子
- 「ガーネット」92号／高階紀一
- 「遙」2号／和比古

- 「Oct.」7号／高谷和幸
- 「EDGING」46号、47号／寺田操
- 「Contralte」42号／坂東里美
- 「いちばぎゃらりい侑香」7月／玉川侑香
- 「プラタナス」66号／玉川侑香

## 編集メモ

2020年は、新型コロナウイルス感染症の蔓延に明け暮れた一年であるといえましょう。兵庫県においては、緊急事態宣言が出され、四月七日から五月二日まで自粛期間が設けられ、経済・文化活動は一時的に停止しました。それ以降、小売状態もありましたが、年末にいたって感染の第三波が押し寄せると、いまだ終息の気配が見えません。今後も十分な感染防止に注意を向ける必要があります。

今年には不要不急の外出を控えること、ひとが集まる場所において三密を避けること、といった勧告が出たり、在宅勤務の機会も増えるなど、日常の生活のありかたそのものに大きな変化がみられました。

こうした変化のなか、15巻目となる本書『ひょうご現代詩集2020』の編集が進みました。会員のみなさんにあつては激動のこの一年を乗り切るために、さまざまのご苦労があつたかと思いますが、多くの会員のみなさんから詩稿をいただきました。深く感謝いたしております。寄せられた作品は個性に満ちており、まず自分の言葉で表現しようとする真摯な姿勢にあふれ、兵庫県における現代詩の多様性を実感しました。本書が会員のみなさんの表現の場のひとつとして機能していきたいといった本来の目的が果たされたのではないかと想っています。

本書の制作にあたって、カバーに掲載した作品を提供していただいた松下玲子さん、扉ページに作品を掲載させていただいた中堂けいこさんを初めとして、校正作業に協力していただいた会員有志のみなさんに、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

(大橋愛由等)

## ひょうご現代詩集2020 (通巻15号)

発行 2021年3月20日  
発行人 時里 二郎  
編集・発行 兵庫県現代詩協会  
〒651-0091 神戸市中央区若菜通6-4-15-203  
山本 眞弓 (兵庫県現代詩協会事務局)  
ホームページ <http://hyogopoetry.sakura.ne.jp/main/>  
印刷所 株式会社 遊文舎  
〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31  
TEL 06-6304-9325 FAX 06-6304-4995  
URL <https://www.yubun.co.jp/>

